

# THE CHRONICLE OF SENDAI SPORTS

スポーツマネジメント人材育成事業 教本  
「仙台スポーツクロニクル」

発行

SPORTS COMMISSION SENDAI

スポーツコミッションせんだい

# CONTENTS

<b>スポーツマネジメント人材育成事業 「教本」制作に寄せて</b> —— 監修者からのメッセージ ——	4
<b>第1章 楽天イーグルス優勝パレードが震災後の地域を盛り上げる</b> 【執筆者：児玉 聡】	5
<b>第1節 優勝パレード？ 誰がどうやって？</b>	5
1. 優勝パレードの可能性を考え始める	5
2. 優勝パレードをいつから話題にしたのか？	5
3. 優勝パレードって、どんなもの？	6
4. 優勝パレードを実施するための連合体を組織	6
<b>第2節 優勝決定までの準備</b>	7
1. 9月の動き	7
2. 地元気運の醸成を図る	7
3. 優勝応援委員会の設立	7
4. パレードコースの検討	8
5. 企業協賛のセールス	8
6. 個人協賛で実施した手法	10
7. 広報の仕方、メディア対応	11
<b>第3節 リーグ優勝決定からパレードまで</b>	11
1. 規模とコースを巡って宮城県警と交渉	11
2. 10月4日に記者発表	12
3. ボランティアスタッフは公募しないという選択	12
4. テレビ中継とメディア対応	12
5. パブリックビューイング	13
6. JR、仙台市交通局、携帯電話会社の対応	14
7. 実施運営マニュアルなどの準備	14
8. 企業および個人協賛の動き	16
9. 沿道人数、主催者発表などの計算方法	16
10. 紙吹雪対応、ゴミ対応について	16
11. 楽天優勝の経済波及効果についての報道	17
12. 優勝パレードを終えて	18
13. 今後の課題	18
<b>第2章 プロ球団と官民支援組織の役割と成果</b> (4つのプロスポーツと官民一体の支援組織) —創設手法と活動例— 【執筆者：清水 義明】	19
1. はじめに	19
2. 官民支援組織の設立と目的	19
3. 各協議会組織が取り組んだ事業	20
4. 各支援組織の構成と役員等	22
5. 支援組織の成果と課題	24
<b>第3章 つなぎ、支え合い、共に創る、仙台・宮城のスポーツボランティア</b> 【執筆者：泉田 和雄】	26
<b>第1節 ボランティアのはじまり</b>	26
1. はじめに	26
2. 派遣型から市民参加型へ	26
3. ごみ問題に“仙台方式”で対応	26

<b>第2節</b>	<b>サッカーワールドカップがやってくる</b>	27
	1. 市民参加型のサポートメンバーを募集	27
	2. 「キックラブ」の通称で市民の間に浸透	27
	3. 機運を盛り上げる活動を展開	27
	4. スタジアムボランティアの立ち上げ	27
	5. グランディ・21ボランティアがスタート	28
	6. SV2004の発足と活動の理念と目的	28
<b>第3節</b>	<b>プロスポーツを支える市民ボランティア</b>	28
	1. 経験とネットワークを持つ組織として	28
	2. プロ野球初のボランティア誕生	29
	3. 楽天イーグルス日本一をボランティアが支える	29
	4. プロバスケットボールでのボランティア活動計画	29
	5. ハンドブックの作成とボランティア運営の体験	30
	6. 「エコ活動」で一足早くSDGsに取り組む	30
	7. 他地域での体験から学ぶ	31
<b>第4節</b>	<b>仙台で全国とつながっていく</b>	31
	1. バスケットのオールスターゲーム	31
	2. 「スポーツリレートーク」がスター	32
	3. 震災後の祈り、願い、決意	32
	4. 東北スポーツボランティア・サミット宣言	32
	5. 89ERSの経営危機	33
	6. プロ野球オールスターの開催とボランティア	33
	7. 仙台のスポーツ関連イベントが大きく変化	33
	8. 楽天イーグルス日本一で終えた2013年	34
<b>第5節</b>	<b>連携によって仲間とともにチャレンジ</b>	35
	1. スポーツボランティアの次世代育成活動	35
	2. 課題を見つけ、改善して次につなげる	36
	3. さまざまな連携をベースに活動を展開	36
	4. 多様なつながりが生む新たな活動	37
	5. さらなる横展開を目指して	37
	6. 情報発信、研修、育成のための取り組み	38
<b>第6節</b>	<b>コロナ禍を経て</b>	39
	1. 見えない相手と戦う	39
	2. コロナ禍を乗り越える	39
	3. テーマは「スポーツ+花と緑」	40
	4. 新しい日常の中で	41
	5. イベントの多様化	41
	6. まとめ	41
<b>第4章</b>	<b>スポーツ振興と人づくり</b>	45
	アイデアを形にする力―「発想」「段取り」「人脈づくり」	
	【特別インタビュー／語り手：武田 均 氏】	
	1. 思い出深い祝賀パレード	45
	2. 組織づくりと継承されるバトン	47
	3. 「仙台方式」確立への道	48
	4. 人脈づくり	50
	5. 継承	52

# スポーツマネジメント人材育成事業 「教本」制作に寄せて

—— 監修者からのメッセージ ——

一般社団法人 スポーツ・ラボ仙台  
理事長 児玉 聡

仙台・宮城は、この20年で“スポーツ”を生かしたまちづくりにおいて、確かな成果を上げてきました。それは、行政、民間、そして市民が連携し、幅広い分野で地道な努力を重ねてきた結果であると考えています。

宮城県内では、2001年のみやぎ国体を契機としてスポーツ施設およびその周辺環境が整備され、2005年には楽天イーグルス、仙台89ERSが誕生しました。これにより、地域における「スポーツ」を取り巻く空気は一気に変化しました。

ここであえて“ ”で括っている“スポーツ”とは、単なる競技や運動を指すものではありません。産業、文化、そしてまちづくりを含む、より広い概念として捉えるべきものであると考えています。

東日本大震災後、プロスポーツが持つ力の大きさを改めて実感しました。特に、2011年4月29日に実施された「復興キックオフデー」は、今もなお強く印象に残る特別な一日です。その力を引き出すことができた背景には、地域そのもののチカラがあったと言えます。

現在、プロ球団と地域との関係は、相互に成長・発展を遂げています。一方で、いくつかの課題も見え始めています。なかでも、「継続性」や「進化する力」という観点において、懸念を抱えています。

加えて、関係者や関係組織の活動のあり方も変化しています。具体的には、長年関わってきた関係者が定年などを迎え第一線を退き始めていること、また行政を中心とした度重なる異動により、十分な引き継ぎがなされていない状況が挙げられます。その結果、意識やノウハウ、

ネットワークが途切れ始めているように見受けられます。

関係者の記憶や関連する記録がまだ残っている今こそ、「スポーツをどのようにまちの活性化に生かしてきたのか」というストーリーを、スポーツクロニクルとして整理しておくべきではないでしょうか。曖昧な思い出話ではなく、公式記録や資料など、事実関係を裏付ける形でまとめることが重要です。そのためには、資料の発掘作業が不可欠となります。

実際、急がなければ廃棄されてしまう資料も増えつつあります。一般公開が難しいものもあるでしょう。しかし、それらは当事者にとっては貴重な知見であり、ノウハウです。まさに、次世代へ引き継ぐべき財産であり、非公開版としてでも体系的に整備していく価値があると考えています。

今回、「スポーツマネジメント人材育成事業」の一環として、スポーツクロニクルを基にした「“スポーツ”人材育成マニュアル」の作成を試みました。スポーツクロニクルとして多くのテーマを掲げることができそうですが、今年度は「プロ球団の官民支援組織」「スポーツボランティア」「優勝パレード」の三つをテーマとした研修教本を作成しました。

なお、取り上げるべきテーマは他にも数多く残っていますし、今回扱った三つのテーマについても、さらなる各論が存在します。加えて、現在進行形の事例もあるでしょう。スポーツクロニクルの取り組みは、一過性のものではなく、今後も継続していく必要があります。そして継承しなければなりません。

# 第1章 楽天イーグルス優勝パレードが震災後の地域を盛り上げる

[執筆者: 児玉 聡]

## 第1節 優勝パレード? 誰がどうやって?

### 1. 優勝パレードの可能性を考え始める

2013年のセ・パ交流戦で東北楽天ゴールデンイーグルス(以下、「楽天イーグルス」)は第2位の好成績だった。シーズン前半戦を終え、47勝35敗とし、球団創設9年目で初めて首位で折り返した。

オールスター戦を終えてシーズン後半戦を展望する声に「楽天の初V」という言葉が出始めたのは7月末だった。例年、楽天野球団では、この時期「クライマックスシリーズ企画」という営業企画を遠慮がちに売り始めるのだが、これまで「優勝」という文字は誰も連想したことがなかったものの、この年ばかりは少し違っていた。

8月8日付の河北新報紙面に「楽天 初Vへエール募集」の社告が掲載された。8月11日付の紙面では、「Kスタ<sup>\*1</sup>2000席増設へ・・・CS、日本シリーズ対応」の記事が載った。9月の主催試合から使用できるよう現在の23,451席を25,000席超に増設する計画だという。これは仮設の臨時席で総工費は約4,000万円が見込まれている。

8月13日付の紙面では「10月までにさらに3000席・・・計画発表」と報じられた。

なお、Kスタ宮城の観客席数をめぐっては、日本シリーズ開催時の収入減を懸念するNPBが、球団に対し28,000席に増やすよう求めてきた経緯がある。

8月20日付の河北新報掲載のコラム「松本匡史のEカルテ」には「東北楽天がリーグ優勝する確率は現時点で、ずばり80%」とあり、単なる期待ではなく、現実味を帯びた話になってきたことがうかがえる。そして、8月29日付の紙面に「楽天、M28点灯」の見出しが踊った。

(脚注)

※1 Kスタ:「日本製紙クリネックススタジアム宮城」の通称。公式略称は「Kスタ宮城」。命名権契約企業は日本製紙株式会社。契約期間は2008年1月1日～2010年12月31日で、1度更新し、2013年12月31日まで続いた。

ここで筆者のことを説明させていただきたい。2013年は河北新報社の地域連携部長をしていた。河北新報社のプロスポーツの窓口役でもあった。2002年に新聞社の営業部門の横ぐし組織となる営業推進室を立ち上げ、2004年のライブドアか楽天かという年からプロスポーツに関わるようになった。横ぐし組織とは新聞社内の編集局、販売局、広告局、事業局、総務局など広範囲の部局のとりまとめ役である。新聞社にとってプロスポーツが非常に間口の広い存在であり横ぐし組織が担当することになった。2004年12月の「楽天イーグルス・マイチーム協議会」の立ち上げから始まって、ベガルタ仙台、仙台89ERS、仙台プロスポーツネットなど官民支援組織に深くかかわってきた。事務局を務める役所の人たちが異動を繰り返す中、2004年から2015年まで関わり続けたので誰よりも長い関りとなっていた。よく事情を知り詳しいのである。

### 2. 優勝パレードをいつから話題にしたのか?

「優勝したら地元はどう対応するんだ?」「優勝パレードってやるんだよね?」「パレードってどうやるんだ?」という声は7月末から出始めた。

当時の私(河北新報社・地域連携部 部長)のメモには、8月2日にマイチーム協議会の事務局がある仙台商工会議所に対して「パレードするなら事務局はどこになる?」「スケジュールはどうなるんだ?」と投げたとある。同時に、仙台市市民局スポーツ振興課長に対し「実行委員会のようなものを立ち上げて検討を始めていると警察に一報入れておくように」伝えたとある。

8月5日には楽天野球団の地域密着部の担当者が、「優勝パレード本気で考えます」と言ってきた。

8月13日にマイチーム協議会・事務局団会議を開催。「組織立てについては会議所(マイチーム協議会)だけでは不足で、行政も関わらなければならない」「(パレードは)11月23日の“ファン感謝祭”の日か? それは可能か?」「コースは二番丁通と仙台駅東口の二本立か?」「資金集めとそのプランニングは?」など課題の抽出を行う。

8月27日、仙台市市民局次長で文化スポーツ部の武田均部長と「優勝決まるまでの市内の応援ムードの醸成」「マイチーム協議会とは別の組織を立ち上げる(財布も別)」「発起人会を早急にしたい」と打合せ。「運営パートナーをどうするか?」などとやり取り。

8月30日、仙台市の武田部長、会議所の間庭洋専務と私で「宮城県との関係整理」「知事、市長を名誉会長に、会長は鎌田宏会頭(つまり事務局は会議所ということ)、副会長に三浦秀一副知事、稲葉信義副市長からなる体制」を組み、楽天優勝応援委員会を立ち上げる方針を確認した。

その日、同委員会の準備会で、「当面は優勝決定までは応援ムードの醸成」「(優勝決定)Xデー以降に優勝パレード実行委員会に名称変更」「資金の財布(口座)準備」「広報、警備計画づくりに着手」することを決定する。

### 3. 優勝パレードって、どんなもの?

優勝パレードといえば、マイチーム協議会が2009年11月、日本ハム優勝パレードを視察するため、札幌市を訪問している。札幌では2007年にも優勝パレードを実施しているが、当時の報告書によると、「札幌すすきの通り約1.0キロメートル」「沿道観客約9万人」「パレード費用9,000万円(企業協賛6千万円、個人協賛3千万円)」「9月29日優勝決定、10月11日

実行委員会立ち上げ」「翌年3月の決算報告まで13回の会合」といった記載があり、「セレモニー概要」や「企業・個人協賛シート」と「決算書」も報告書の中に綴られていた。

日本ハム優勝パレードの場合は、2007年、2009年ともパレード組織のトップが札幌市長で、事務局が札幌市役所だった。名誉委員長に北海道知事、副委員長に札幌商工会議所会頭と応援する会会長(JR北海道会長)、委員に北海道新聞社社長らとなっていた。実務を担当する「企画運営委員会」メンバーには委員長に札幌市観光文化局長、委員に北海道庁部長、会議所常務理事、JR北海道部長、北海道新聞社取締役、札幌ドーム本部長らの名前がある。おそらくこの企画運営委員会メンバー社の実務者が事務局を構成していたと思われる。

2004年設立のマイチーム協議会がある楽天イーグルスの場合、事務局をどこが受け持つかが課題となりそうだ。

そもそも「楽天イーグルスが優勝したらパレードやるよね」という声上がる一方、「でも、その優勝ってリーグ優勝? CS優勝? 日本シリーズ優勝?」というように、考えてみると優勝には3タイプある。視察当時は、あまりその違いに実感がなかった。リーグ優勝してもCSで負けることもある。リーグ優勝しなくてもCS優勝があり得るし、そのまま日本シリーズに出て負けることもある。

「優勝」という言葉が出始めた2013年の時点では、「CS優勝だけでもパレードするのか?」という声もある中、「でもとにかく初めてだからどの優勝でもパレードはやろう」というのが、当時の事務局の考え方だった。

### 4. 優勝パレードを実施するための連合体を組織

実際に優勝パレードを行うに当たって、実行委員会形式で行うことについては前述したとおりであり、優勝パレード実行委員会なるものの役割についてもこれまでの仙台の祭りやイベン

トの開催になぞらえて考えることはできた。

パレード実施に向けて歩みを進めるためには、「楽天野球団との交渉」「コース選定」「パレード演出」「警察との協議」「警備計画」「スタッフ人員集め」「資金集め」「広報」などが課題となる。

これら多岐にわたる業務を、短期間に設計し資源を確保、コントロールする事務局はどこが担うべきか？事務局組織のトップが実行委員会のトップとなるが、それはどこか？といったことを決めなければならなかった。

先に述べたとおり、マイチーム協議会という支援組織がある。宮城県(企画総務課)、仙台市(スポーツ振興課)、河北新報社、JR東日本、仙台商工会議所青年部、仙台観光国際協会、仙台商工会議所を役員社とする組織で、トップは仙台商工会議所会頭、事務局は商工会議所である。宮城県知事、仙台市長は顧問となっている。同協議会には、「事務局団会議」という実務者会議があり、事務局団の構成メンバーは役員社の実務責任者だ。

日ハムの場合は、優勝パレード組織トップが札幌市長、事務局が札幌市役所だった。2004年設立のマイチーム協議会がある仙台ではどうするか。つまり、事務局をどこが受け持つかが、予想通り焦点となった。

2013年8月30日、当時の仙台市文化スポーツ部・武田部長、仙台商工会議所・間庭専務理事、私で話し合い、「仙台市が全面的に協力体制を取るから商工会議所で事務局を受けしてほしい」ということでトップは会議所会頭、事務局は会議所ということになった。そして、マイチーム協議会の事務局団と同じように、宮城県、仙台市、河北新報社、JR東日本ほかの連合体で事務局団を形成することになった。

億を超える資金集め、数千人のスタッフ募集・管理などに取り組むため、宮城県庁、仙台市役所の全面支援をいただきながら、仙台・宮城の総力結集を図らなければならない。その組

織立てを行った。

## 第2節 優勝決定までの準備

### 1.9月の動き

リーグ優勝決定までの動きを時系列で整理すると、次のとおりであった。

9月 2日	楽天イーグルス優勝応援委員会 設立総会
9月 3日	事務局会議
9月10日	企画運営委員会①
	【議題】ポスター、PV、協賛、コールセンター設置
9月12日	「優勝パレード基本計画書」を検討
9月17日	企画運営委員会②
	【議題】警備計画、優勝決定後について
9月18日	宮城県警と打ち合わせ
9月20日	楽天野球団(池田副社長)と協議
9月25日	企画運営委員会③
	【議題】応援委員会第2回総会対応
9月26日	Kスタ、国分町でPV、「リーグ優勝決定」
9月27日	宮城県警と打ち合わせ

次項から、これらの主な動きについて、順を追って解説していきたい。

### 2.地元気運の醸成を図る

優勝が決まる前に「パレード実行委員会」を名乗るわけにはいかない。でも必要な作業に手を付けなければ間に合わない。一方で楽天野球団から「Kスタ宮城球場は連日盛況で周辺の盛り上がりもすごい。でも、仙台駅の反対側(西口)ではあまりそれが感じられない。何か手はないだろうか」との声があった。

そこで、優勝を目指すチーム・球団を地域が後押しする機運醸成のための組織的活動をしよう、その陰でパレード実施に向けた対応を始めようと考えたのである。優勝が決定したら看板を変えて「パレード実行委員会」にしたらいの。

### 3.優勝応援委員会の設立

8月30日、楽天イーグルス優勝応援委員会(以下「優勝応援委員会」)の準備会が開か

れた。そして、9月2日には同委員会の設立総会が開催され、会の規約<sup>※2</sup>や人事案<sup>※3</sup>などが承認された。

優勝応援委員会発足当初は構成メンバーによる出資金100万円で事業をスタートさせた。そして、カウントダウンボードやポスター制作などの広報と協賛募集案内(協賛企画書)制作などの作業を進めることにした。

会長にマイチーム協議会会長(仙台商工会議所会頭)が就任したが、副会長に副知事、副市長が名を連ねたのは珍しいケースであり、実行委員会の宮城県庁と仙台市役所への期待の大きさがうかがい知れよう。

(脚注)

※2 会の規約:2013年9月2日に決議された楽天イーグルス優勝応援委員会の規約は次のとおりである。【目的】委員会は楽天イーグルスが球団設立後初となるシーズン優勝、クライマックスシリーズ優勝、日本シリーズ優勝を達成するよう、関係機関との調整及び広報活動を行い、地域一体となった応援を通して球団の地域密着の一層の推進を図るとともに、楽天イーグルスの優勝を機運とした地域の活性化を図ることを目的とする。【事業】1.楽天イーグルスの優勝に向けた応援に関すること 2.優勝パレードに関すること 3.その他目的達成のために必要な事業【事務局】委員会の事務を処理するため事務局を仙台商工会議所に置く。

※3 人事案:決議された人事案は以下のとおり。名誉会長に宮城県知事と仙台市長、会長にマイチーム協議会会長(仙台商工会議所会頭)、副会長に宮城県副知事と仙台市副市長、委員と監事に河北新報社、JR東日本仙台支社、仙台観光国際協会、仙台青年会所の代表者、オブザーバーに楽天野球団の池田副社長がそれぞれ就任した。

#### 4.パレードコースの検討

優勝パレードに関して2010年6月に事務局団会議で、「もし楽天イーグルスが優勝したら(いつになるかは想像もできないが)、どんなパレードコースが考えられるだろうか?」と検討したことがある。その時の案は次のコースであった。

- (1) 東二番丁通コース(事例:仙台・青葉まつり、荒川静香さん金メダル凱旋パレード)  
青葉通東二番丁交差点⇒勾当台公園市民広場
- (2) 定禅寺通コース(事例:仙台・青葉まつり、サンタパレード、マラソン、駅伝)  
定禅寺通・晩翠通交差点⇒勾当台公園市

民広場

- (3) 宮城野大通コース(事例:仙台すずめ踊り)仙台駅東口⇒Kスタ宮城・球場

以上三つのコースが想定されると思ったものの、当時は、正直、本気で検討したわけではなかった。

9月12日に事務局内で「優勝パレード基本計画書」「見積書」「協賛案内書」が検討された。

9月17日の企画運営委員会②で、上記「基本計画書」「見積書」などが共有され、警備を含めたパレードの全容が示された。この時点では、前記の2010年に検討した一つ目の案と三つ目の案を合わせたパレードコースで、10万人規模と示された。

9月27日、宮城県警と数回打合せの後、パレードのコースは東二番丁通、開催は11月24日と発表することの了解を得た。

#### 5.企業協賛のセールス

札幌の日ハムの例では、企業協賛6千万円、個人協賛3千万円だった。仙台は札幌圏と同等の経済圏と考えればこの金額は何とかなると想定した。

11月24日(日)にパレード実行となれば、企業協賛の締め切りはいつに設定すべきか?看板など掲出物の原稿集め、校正、制作、パレード用バスの協賛企業の広告貼り付けなどの作業日数を勘案して、セールスの締め切りは11月10日(日)ごろと想定した。ここまでに企業協賛6千万円のめどを付けなければならない。

まずは企業協賛を案内する楽天イーグルス優勝パレード実行委員会(以下、「優勝パレード実行委員会」)発の「協賛企画書」を作成する必要がある。社名を掲出できる“媒体”により、A～Eの協賛メニューを決めた。

パレードの主役となる選手が乗る2階建てバスは5台。その前面看板は五つしかない。バス側面、後面もある。それと小口協賛向けにパレード内での手持ちパネルも準備した。

表1:楽天イーグルス優勝パレード実行委員会

構成団体	役員
楽天イーグルス・マイチーム協議会	名誉会長 村井嘉浩 宮城県知事
仙台商工会議所	名誉会長 奥山恵美子 仙台市長
宮城県	会長 鎌田宏 楽天イーグルス・マイチーム協議会会長 仙台商工会議所会頭
仙台市	副会長 三浦秀一 宮城県副知事
河北新報社	副会長 稲葉信義 仙台市副市長
東日本旅客鉄道株式会社仙台支社	委員 一力雅彦 株式会社河北新報社 代表取締役社長
仙台観光コンベンション協会	委員 西野史尚 東日本旅客鉄道株式会社 執行役員仙台支社長
仙台青年会議所	監事 保科学 公益財団法人仙台観光コンベンション協会 副理事長
	監事 山田宗基 公益社団法人仙台青年会議所 理事長
	オブザーバー 池田敦司 株式会社楽天野球団 取締役副社長

特に五つしかないバス前面の協賛社にはどういう企業がふさわしいか。ここは楽天イーグルスのオフィシャルスポンサー限定としなければならないと判断し、200万円の値付けとした。また、広く協賛社であることを知らせるため、河北新報への広告紙面もセットした。

9月26日から地元大手スポンサー企業に打診を始めた。一般的に企業内での決裁を得るためにはそれなりの時間を要する。優勝決定後でないとはパレード実施の協賛案内をすることはできないが、印刷物(企画書)などの準備をしておかなければならない。

10月4日、表1の構成団体と役員で優勝パレード実行委員会が発足。そして、その日から正式に案内を始めたのである。約1ヵ月の短期決戦の勝負となる。優勝パレード協賛を一度でも経験をしていれば要請を受ける企業側も理解が早いだろうが、なにせ初めてのことなので反応が読めない。「企業協賛企画書<sup>※4</sup>」を作成し、楽天野球団や主要スポンサーの扱い広告会社にも渡した。

5台のバス前面に看板を掲げることができA協賛の5社には、慎重にアプローチした。オフィシャルスポンサーの順番、球場・球団との関係、地元との関係に配慮し、アイリスオーヤマ、アサヒビール、日本製紙、JR東日本、河北新報社に声をかけた。

11月12日に協賛企業による6千万円をめどがかったのでセールス終了とし、締め切った。そしてその後、広告原稿制作や事前告知作業に入ることになった。協賛社数は53社となった。

(脚注)

※4 企業協賛企画書:「東北楽天ゴールデンイーグルス優勝パレード企業協賛のお願い」の名称で、楽天イーグルス優勝パレード実行委員会名で作成され、企業協賛のセールス活動に使用された(図1~7:企業協賛企画書の主なページ参照)。

図1~7:企業協賛企画書の主なページ



【ご協賛メニュー】

協賛メニュー	協賛金額(税別)	パレードバス 北東の各自治体協賛車の掲載場所	パレード開催 の日程	同協賛 の日程	宇都宮バス の掲載
A協賛 バス前面(2箇所) バス側面(2箇所)	5席 ¥2,000,000	● バス前面(2席+側面(1箇所))	●	●	—
B協賛	35席 ¥1,500,000	● バス側面(両側各1箇所)	●	●	—
C協賛	5席 ¥1,200,000	● バス後面(下段)+側面(1箇所)	—	●	—
D協賛	5席 ¥800,000	● バス後面(上段)	—	●	—
E協賛	30席 ¥300,000	—	—	—	●

4 **A協賛** **5社限定**

①パレードバス前面2階部分  
社名ロゴまたは商品名ロゴ

パレードのメインであるパレードバス前面2階部分に社名ロゴまたは商品名ロゴ(4)を掲出。  
※パレードバスは全長17.5m、標準幅は2.5mです。

※サイズ W2000×H1300  
※掲載写真はイメージです。  
※掲載写真はイメージです。  
※掲載写真はイメージです。

5 **A協賛** **5社限定**

②パレードバス 側面(片側1箇所)  
社名ロゴまたは商品名ロゴ

パレードのメインであるパレードバス側面に社名ロゴまたは商品名ロゴ(4)を掲出。  
※パレードバスは全長17.5m、標準幅は2.5mです。



※サイズ W2000×H1300  
※掲載写真はイメージです。  
※掲載写真はイメージです。  
※掲載写真はイメージです。

※御社名掲出位置(バスの左側or右側及び①～③の場所)につきましては実行委員会にご一任下さい。

6 **A協賛** **5社限定**

③パレード 横断幕  
社名ロゴまたは商品名ロゴ

パレードを走る観客への社名ロゴまたは商品名ロゴ(4)掲出。  
※パレードバスは全長17.5m、標準幅は2.5mです。



※サイズ W2000×H1300  
※掲載写真はイメージです。  
※掲載写真はイメージです。  
※掲載写真はイメージです。

7 **A協賛** **5社限定**

④11月23日河北新報  
社名ロゴまたは商品名ロゴ

パレード前日(11月23日)に本紙(朝刊)に社名ロゴまたは商品名ロゴ(4)を掲出。  
※パレードバスは全長17.5m、標準幅は2.5mです。



※サイズ W2000×H1300  
※掲載写真はイメージです。  
※掲載写真はイメージです。  
※掲載写真はイメージです。

8 **A協賛** **5社限定**

※A協賛は、2013楽天イーグルスオフィシャルスポンサー限定とさせていただきます。

①パレードバス 前面2階窓部分  
社名ロゴまたは商品名ロゴ

②パレードバス 側面(1箇所)  
社名ロゴまたは商品名ロゴ

③パレード 横断幕(A協賛社用)  
社名ロゴまたは商品名ロゴ

④河北新報朝刊(11月23日付)  
社名ロゴまたは商品名ロゴ

**ご協賛料金 2,000,000円(税別)【5社限定】**

## 6.個人協賛で実施した手法

個人協賛については、まず「振込口座」を準備することから始めた。過去、多少時間がかかった経験があったので早めに手を打った。宮城県内に本店を置く銀行、仙台市内に支店を置く東北の銀行、そして、ゆうちょ銀行に「振込手数料なし」の口座を開設した。

個人協賛の広報活動に関連し、協賛を募るポスター(図8)の制作や街頭受付も開始した。Kスタでは10月4日からスタートさせた。ホーム戦のある全試合(11月3日まで)と、「仙台なびっく」と「東北ろっけんパーク」※5でも11月17

図8:個人からの協賛金を募るポスター



東北楽天ゴールデンイーグルス  
優勝パレード個人協賛金のお願い

初めてのパレードを  
みんなで盛り上げよう!!

1st TIME CHAMPIONS  
2013  
Rakuten Eagles

優勝パレード 期日/2013年11月24日(日)  
会場/東二番丁通

●詳細につきましては、決定次第ホームページ(<http://rakutenegles-parade.com/>)で見たいと思います。

優勝パレード個人協賛金受付中!

◆ 本支店の振込手数料が無料の金融機関

七十七銀行 | 仙台銀行 | 社の都信用金庫 | 宮城第一信用金庫

◆ 本支店が協賛期間中は11月1日(日)から11月23日(金)までの期間、本支店の振込手数料が無料でお届けいたします。  
◆ 本支店内に振込受付の専用振込用紙を置いてあります。

◆ 現金による受付

東北ろっけんパーク(11月23日 10時～18時 ※定休日なし)  
仙台なびっく(11月23日 10時～18時 ※定休日なし)

◆ その他金融機関

郵便局・ゆうちょ銀行

※ゆうちょ銀行の振込受付は、必ずゆうちょ銀行の窓口にておこなわれます。

一口3,000円で記念グッズ進呈!!

主 催 / 楽天イーグルス優勝パレード実行委員会 <http://rakutenegles-parade.com/>

日まで街頭受付を行った。

ちなみに、パレード当日にも受付を置いて多くの人の協賛を得ている。

個人協賛は特に11月19日から22日までの4日間で急上昇したことは特筆すべきだろう。これについては次節で詳述したい。

(脚注)

※5「仙台なびっく」と「東北ろっけんパーク」:仙台市中心部商店街の賑わいづくりと東北復興支援の拠点として設けられた交流スペース。「仙台なびっく」は2011年8月一番町四丁目商店街に、「東北ろっけんパーク」は2012年5月クロスロード商店街にそれぞれオープンした。

## 7. 広報の仕方、メディア対応

10月初旬、在仙テレビ局から「パレードはどのようなのか？」と問い合わせがあった。まだ、警察との協議が終わっていないので詳細を伝えるわけにいかないとは思ったものの、「今回パレードを全国に伝えることが東日本大震災の被災地の状況を伝えることになる。特にテレビ中継は日曜の昼となるとキー局との折衝が地元局で大事になる。また、カメラ設置場所の事前確保も必要だろう。ざつくばらんに相談してみようか？」と考え直して、仙台市の武田部長に相談することにした。

10月16日に地元テレビ局幹事社(東北放送、宮城テレビ)と打合せの場を持った。さらに、10月23日には、在仙全社参加の打合せを行った。

そこではまだ警察との協議が終わっていないので「絶対に報道しないでほしい」との条件付きでパレード運行計画案を説明した。

その後、事務局の商工会議所と多くのメディアとの間で質疑応答がパレード開催前日まで重ねられた。

全国から寄せられる個人協賛の申し込みやメディアからの問い合わせが想定されるので、コールセンターを置くべきと考え、10月7日より河北新報社本社の1室を賃貸してコールセンターを開設した。

## 第3節 リーグ優勝決定からパレードまで

### 1. 規模とコースを巡って宮城県警と交渉

第1節の2で述べたとおり、8月2日、仙台商工会議所に対してパレードの事務局をどこに置くか、また、スケジュールをどうするか尋ねるとともに、仙台市に対し、実行委員会を立ち上げてパレードの検討を始めていると警察に一報入れておくよう伝えている。

宮城県企画総務課、仙台市スポーツ振興課と宮城県警との9月18日付打合せメモがある。両者とは、この前後にも、数回打合せがあった。

このメモによると、その日、県と市は、県警に対して「市役所を終点に東二番丁通をパレードする案と仙台駅東口から球場へ向って宮城野通をパレードする案が示されたが、予算的に両方実施は不可能と考えている」「会議所会頭の意向もあり東二番丁案が有力となっている」と説明している。

県警からは次の見解が提示された。

- (1) 需要予測10万人の根拠が不明。他都市の例を見ると、千葉で20万人、福岡で25～33万人の実績がある。10万人以上来た場合の対策が必要。
- (2) パブリックビューイングを行うなどして、観客を分散させる工夫も必要。Kスタで選手が出演するイベントなどあれば観客が分散するのではないか。
- (3) 迂回路の計画が示されていない。具体的に示してほしい。
- (4) 東二番丁案が有力な理由は何か？  
県と市からは次のような説明があった。
  - (1) 東二番丁の方が道幅が広く、人が多く入る。
  - (2) パレード終了後、商店街への誘客が図れる。
  - (3) 東二番丁は中央分離帯があるため、観客をブロックできる。
  - (4) 宮城野通は中央分離帯が途中まで外せるが、途中から固定になる。
  - (5) 宮城野通の駅前には長距離バスの発着が

多い。

さらに県警から以下の意見が出た。

- (1) バスの高さも調べる。5mを超えると速度感知器にぶつかる。
- (2) 交通規制の告知方法についても、計画案を提出してほしい。
- (3) 20万人入れるとすると、ダイエー前から青葉通に折れるコースなど検討の余地があるのではないか？
- (4) 需要予測を多めにみてコース案を組んでほしい。複数案欲しい。
- (5) せっかくパレードを実施するのであれば、雑踏の対策を中心に考えるべき。中止になるような事態は避けるべき。

これらの意見に対し、県と市は「本日いただいた意見を踏まえてコース案を練り直し、改めて相談に来る」と回答している。

9月18日時点でのやり取りは以上のとおりであった。

## 2.10月4日に記者発表

「10万人」の根拠は札幌の例(2007年、2009年)からきているのだが、宮城県警は、千葉や福岡の例を調査していたようだ。補足になるが、当時の私のメモには、「6人/m<sup>2</sup>が妥当では」「車いすゾーンも作る」「30分で終わらせる」との追記がある。

この時、20万人の計画が必要で、札幌の「1km、10万人、1億円」をベースにした案が崩れた。10万人→20万人への変更はパレード距離の延伸につながって支出の大幅増となり、全面的な見直し作業が求められる。企業協賛6,000万円を目標とするパレード企業協賛企画書を9月10日に発注済みで、優勝決定直後から正式にセールス開始を予定していた。

しかし、20万人に変更するしかない。つまり距離を延ばす。必要人員が増えるということになる。

開催日とコースに関し、県警からOKが出た

のは9月27日のことだった。武田部長からの連絡で分かった。10月2日に企画運営委員会、4日にパレード実行委員会で報告、記者発表となった。ただし、この発表ではコースの詳細は11月上旬に公表予定とした。

## 3.ボランティアスタッフは公募しないという選択

優勝パレードの街頭警備には人手とコストがかかる。2007年の札幌市の例では、市職員の1,051人をはじめとして約30団体から2,276人のボランティア協力があった。

ボランティアを公募する案もあったが、身元確認や当日の指示系統の安全・安心性確保を考慮し、警備関係者から万が一のことが発生するリスクを回避するためにも、実行委員会関係の団体から募ることにした。

そして、仙台市交通指導隊300人、仙台市職員の292人をはじめ9団体から1,260人のボランティアが集まり、主に街頭警備に当たっていただくこととなった。これに関係スタッフを含めると総勢2,200人の体制となったのである。

## 4.テレビ中継とメディア対応

業務を進める中、テレビ中継をうまくしてもらう工夫が必要と気が付いた。このパレード報道自体が「今年の日本の10大ニュース」候補となるよう、東日本大震災の被災地発のニュースとしても話題性は十分のはずだと思ったのである。

中継は単にテレビ局が勝手にやってくれるものとは捉えず、報道しやすいように、やれることは全部やろうと考えた。少なくとも沿道にカメラスペース、記者席を事前に確保しておく必要があるはずだ。

地元テレビ局も9月26日のリーグ優勝、10月4日のパレード実行委員会の発足のタイミングで、テレビ局間で相談をしていたらしい。

パレード開催日の11月24日は日曜日だ。それもスタートは午前11時を予定している。この時間帯は全国的に東京キー局の番組が流れ

ている。これを変えるには相当の腕力と時間がかかることが予想された。警察との協議中ではあるが、TV局との場を設けるべきと考えた。

旧知のテレビ局責任者に聞いてみた。というより向こうから聞いてきた。「どうなっているの?」と。

「引っかかっているのは、楽天側から放映権の請求あるかだ」と聞いて、実行委員会として楽天野球団に確認することを約束。さっそく池田敦司副社長に放映権の請求について確認した。答えは「パレードをやっていただく立場なので全く考えていない。ただし、何回も数年間もその時の映像を繰り返し無断で使われることに問題はあるかもしれない」ということだった。この見解を取れたので、10月16日、幹事社の東北放送と宮城テレビに仙台市役所に来ていただき打合せを行った。10月23日に宮城県庁会議室で「パレードTV局会議」を開催した。スポーツ紙も含めた新聞、雑誌、その他媒体を含んだ東北スポーツ記者会(幹事社;共同通信)にも同じ話をした。

11月23日付の河北新報には「局の壁超えTV生中継」の記事が掲載された。その主な内容は次のとおりである。①優勝パレードを地元民放4社とNHKがカメラやスタッフを合同で手配し、そろって生中継することが22日分かった。②当日はパレードのコースをエリアなどで分担し、スタート地点周辺を東日本放送が、隊列の中を宮城テレビが撮影。選手らのバスには東北放送が同乗し、編集などの映像管理を仙台放送が受け持つ。NHKはヘリコプターから全体像を空撮し、合計10台以上のカメラで捉える。③編集担当者が相談、各社間の調整を経て実現にこぎ着けた。

## 5.パブリックビューイング

楽天野球団と連携しリーグ優勝が最も早く決まる日程からパブリックビューイング(以下、「PV」)の準備を開始した。

ビジター戦は特に街の活気を創出する点からPVが必要だと感じていた。9月26日、楽天野球団ではKスタで、マイチーム協議会では国分町・元鍛冶丁公園でそれぞれPVを開催することにした。

この日の対西武戦(所沢市)は、当時の奥山仙台市長もKスタに駆け付けたとのことであった。

私も「まさか今日決まるとは思わない」と考えながらも、プレーボールの時間にKスタに行ってみた。バックネット裏と内野席を開放してのPV。「半分くらい入っているかな」との印象。その後、国分町の肴町公園はどうなっているかとのぞきに行った。試合は劣勢、「やはり今日は決まらない」と思った。現地には仙台市議会の西澤啓文議長らと雑談をしていた。ところが試合が進むにつれて楽天が追い上げ、同点、そして逆転。最後は田中将大投手が西武の浅村選手を三振に切って取り、なんと優勝決定となった。肴町公園のPV会場はどンドン人が湧き出て、決定の瞬間は公園にあふれんばかりの人々。みんなテレビやラジオで注目していたんだと実感した。「喜びは多くの人と分かち合いたい」という雰囲気の中、現場に居合わせた全員で万歳をした。

一方、KスタのPV会場も満員になったと聞く。球団初の「優勝決定の瞬間」に多くの人々が沸き立った。仙台市中心部の商店街でも同じ動きがあったという。

日本シリーズの終盤、11月2日にも楽天野球団による球場前広場でPVが行われた。「人波で埋め尽くされた。1万人以上のファンたちが熱戦を見守った」と河北新報は伝える。楽天野球団は安全確保の必要性から警察と協議の上、球場外ではあるが入場を制限したという。

11月3日の決戦日は、Kスタ隣の仙台市陸上競技場をPV会場とした。仙台市の決断による開催だ。陸上競技場フィールド内に複数台のモニターを設置してのPVだった。いったい何人入ったのだろうか。私はKスタの高いところ

から隣の陸上競技場を見たが、人で埋め尽くされていた光景を思い出す。この日、観戦チケットは当然売り切れで、球場を含めこの周辺におそらく4万人以上の人があったのではないだろうか。そして楽天イーグルスが日本一を決めた後、新聞の号外(図9)が発行された。

図9:2013年11月3日(日)河北新報号外



## 6. JR、仙台市交通局、携帯電話会社の対応

11月24日に行われる優勝パレード対応として、JR東日本は21日、「東北、石巻、仙石、仙山の4線で臨時列車計18本運行する」と発表した。内訳はパレード開始前の午前9時から10時台に仙台駅に到着する5本、終了後の午前11時から午後2時台に仙台駅を発車する13本。ほかに東北本線、仙山両線と仙台空港アクセス線では、通常ダイヤの9本を平常より2両ずつ増やして運転するという。パレード実行委員会の20万人予想のうちJR東日本は4-5万人が列車を利用すると想定、約17,600人分の輸送力を増強することにした。

仙台市交通局も24日午前9時半から午後0時半まで、地下鉄南北線の勾当台公園駅と

広瀬通駅の一部出入口を閉鎖すると発表した。またパレード前後の時間帯に地下鉄を20本増発する。午前9時から午後1時の運行間隔は、通常の7分から4分に短縮される。

携帯電話会社も対策を取った。2011年の「東北六魂祭」では一部で通信障害が発生しており、実行委員会の要請に基づき調査した結果、通話や通信に障害が出る可能性があることが分かった。基地局の電波を増強し快適な通話環境を確保するとした。移動基地局車を配置する会社もある。

## 7. 実施運営マニュアルなどの準備

11月24日の優勝パレードの概要は表2の通りである。出発式が午前10時50分から11時まで、パレードが11時から11時30分までというスケジュールである。

表2:楽天イーグルス優勝パレードの概要

主催	楽天イーグルス優勝パレード実行委員会
日時	2013年11月24日(日) 11:00~11:30
場所	東二番丁通(仙台商工会議所前~五ツ橋交差点) 全長約1.5km
参加者	球団社長、監督(1軍・2軍)、コーチ(1軍・2軍)、選手(1軍・2軍)、楽天イーグルス・マイチーム協議会会長、宮城県知事、仙台市長、東北ゴールデンエンジェルス、仙台フィルハーモニー管弦楽団ほか

パレードコースについては、球団のウェブサイトコースが公開されたのは11月9日だった(図10)。

そしてパレードの実施に当たっては、「楽天優勝パレード」実施運営マニュアル<sup>※6</sup>を作成し、パレード運行計画表を作成した。これとは別に当日の詳細なスケジュール表も準備した。

仙台フィルハーモニー管弦楽団からの申し出で、パレードのスタート時にファンファーレを演奏してもらうことになった。もちろん、楽天イーグルス公式チアリーダーの東北ゴールデンエンジェルスや、宮城県警音楽隊&カラーガード隊、仙台市消防局音楽隊&カラーガード隊も参加する。

図10:11月9日、球団が公開したパレードコース位置図  
(楽天イーグルス公式ウェブサイトから)



(脚注)

※6 「楽天優勝パレード」実施運営マニュアル:2013年11月20日付の同マニュアルの概要は下記のとおりである。

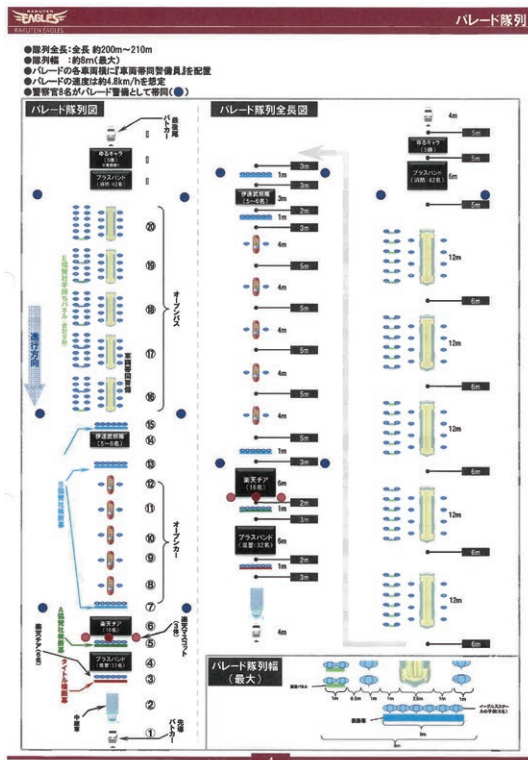
- ・出発式・・・10:50～11:00 パレード・・・11:00～11:30
- ・仙台商工会議所前～五ツ橋交差点 全長約1.5km
- ・来場想定人数15万人
  - \* 1㎡に4人＝収容人数17.2万人
  - \* 1㎡に6人＝24.2万人【最大収容人数】
- ・パレードコースは、広瀬通で順行から逆行に変更。片側3車線をパレード通過コースにして残り車線(対向車線全部と)と歩道(一部)を観客席とする。
- ・「インフォメーション(救護)」をコース上に4カ所、ほかに仙台駅2Fに設置
- ・パレードスタンバイエリア(定禅寺通りから会議所前、110m)
- ・隊列全長:約200m～210m、隊列幅:最大8m
- ・パレードの各車両横に「車両帯同警備員」を配置
- ・パレード速度は約4.8km/h
- ・警察官8名がパレード警備として帯同
- ・パレードの順番※7:①先導パトカー②中

- 継車③タイトル横断幕④ブラスバンド(県警32名)⑤協賛社横断幕、楽天マスコット⑥楽天チア⑦協賛社横断幕⑧～⑫オープンカー5台⑬協賛社横断幕⑭伊達武将隊(5人)⑮協賛社横断幕⑯～⑳オープンバス5台㉑ブラスバンド(市消防42人)㉒ゆるキャラ(5体)㉓最後尾パトカー
- ・オープンカー4m(帯同警備員各2名)、オープンバス12m(帯同警備員各8名)
- ・オープンカー(レクサス1台、クラウン4台)・・・仙台トヨペットより(運転手も)
- ・オープンバス(全長12m、全高3.8m、全幅2.5m)▶10/07スカイバスサイズ実寸採寸▶11/20東京→仙台 移動日(屋根付き車庫へ)▶11/21仙台陸運局/No.変更→テストドライブ(現地運転手)▶11/22ラッピング(屋根付き車庫)▶11/23ラッピング(屋根付き車庫)▶11/24本番(現地運転手)▶11/25仙台→東京 \*屋根付き車庫は仙台バス(岩沼市)を利用
- ・交通規制は9:30～12:00 東二番丁通及び関連道路(広瀬通、青葉通り、南町通り、北目町通りは、パレード直前まで車両通行可能としパレード開始直前で交通規制(パレード隊列通過後まで)
- ・渋滞解消予想時間:規制解除後2時間
- ・パレード前日(23日)午後から準備開始、18:00～オールスタッフミーティング、23:00～資機材配置、夜間警備
- ・パレード当日、5:00判定会議①、以後一時間ごとに7:00③まで
- ・案内誘導・警備関係要員2,089人演出・進行・運営関係212人
- ・控室確保26カ所(商工会議所、市役所、河北新報社、市民広場、五橋公園)
- ・混雑が予想されるアーケード商店街(おまち商店街、クリスロード商店街)に事前に混雑状況を想定した放送原稿を準備

(脚注)

※7 パレードの順番:マニュアルに「パレード隊列」(図11)として具体的な隊列を図式化して記載した。

図11:パレード隊列



(脚注)

※8 約1億2500万円が集まった:個人協賛の入金額は次のとおりであった。

(下記データをもとに作図。縦軸に「単位:円」の表記入る)

図12:個人協賛入金額



\*上記グラフは下記数値を基に作成

11月5日	784,699円
11月6日	1,085,533円
11月7日	1,583,333円
11月8日	1,499,000円
11月11日	1,184,000円
11月12日	1,332,000円
11月13日	1,236,500円
11月14日	2,023,000円
11月15日	2,123,600円
11月18日	1,558,500円
11月19日	6,812,057円
11月20日	5,596,743円
11月21日	5,037,418円
11月22日	6,481,000円

## 8.企業および個人協賛の動き

第2節で企業協賛や個人協賛の経緯に触れているが、個人協賛の集まり具合には、特に注目すべきことがあった(図12)。

11月18日のパレード実行委員会、その後の記者会見で「個人協賛金が目標額9,000万円を3,000万円下回っている。幅広い市民に協力を」と呼びかけた。実行委はパレードの事業費を1億5,400万円と見込み、警備予算が膨らんだため個人協賛の目標額を当初の7,000万円から9,000万円に引き上げていたのである。

実は個人協賛の入金は10月末から始まって、日本シリーズ優勝決定後の11月5日から本格的に入金されてきた。入金状況は次のグラフのとおりであった。「約3,000万円不足」と発表した翌日から最後の4日間に入金額が激変激増し、結果的に目標の9,000万円を大きく上回る約1億2500万円が集まった<sup>※8</sup>。

## 9.沿道人数、主催者発表などの計算方法

主催者によるパレード会場の人数発表を開始10分前にするよう警察から指導があった。計算の方法はパレード会場にあらかじめ設けられた3カ所のモデルスペースに、その時間に何人いるかで計算するというものだった。1平方メートル内の平均人数を出し、全体面積を掛け合わせたのである。全体面積は「基本計画」や「運営マニュアル」に記載されている。その結果、当日の主催者発表は214,000人となった。

当初、札幌の例から10万人を想定したパレード計画に「20万人での計画修正」を求めた宮城県警の読みの確かさには驚かされた。

## 10.紙吹雪対応、ゴミ対応について

北海道新聞社など日ハム優勝パレード実行時の経験から、「紙吹雪は感動するよ」「終了後

の道路清掃に適した紙のサイズも教えるよ」とアドバイスを受けていた。

事務局では東二番町通の一刻も早い車道規制撤廃を優先するべきとの判断で今回は紙吹雪を断念した。

一方で20万人の人出が予測されるパレード会場には大量のごみが落ちているのではないかとゴミ搬出用トラックを準備していた。ところが、ほとんどゴミがなく、ごみ袋一つぐらいを荷台に載せた程度だった。これには関係者はもちろん、参加者も驚いていたのではないかと。

## 11. 楽天優勝の経済波及効果についての報道

楽天イーグルスの活躍がもたらす地元への経済効果については、さまざまな分析が行われた。その主なものを河北新報の報道からピックアップして紹介しておきたい。

### 【楽天日本一なら 経済効果85億円上積み 七十七銀行試算】(2013年9月19日付)

東北楽天がパ・リーグを制し、日本一となった場合、宮城県内への経済波及効果が少なくとも84億5800万円に上ることが七十七銀行の調べで分かった。商店街単位のセールや優勝パレード分は積算しておらず、同行は、「実際にはさらなる金額の積み上げが期待できる」と分析している。

### 【楽天優勝 経済効果229億円 関西大・宮本教授が試算】(2013年9月28日付)

東北楽天のパ・リーグ制覇が宮城県にもたらす経済効果について、関西大学大学院の宮本教授(理論経済学)は229億5900万と試算した。チームが日本一に輝いた場合は、271億5500万円に拡大すると分析している。

優勝セールをはじめとする商業の販売増加額は、他球団の実績などを踏まえて前年同期比3%増の99億7500万円と算定。優勝パレードによる消費額も、延べ10万人の参加で6億7300万円と推測した。

(注記)実際には21.4万人の参加だったの

で、単純計算14億5000万円の効果があったと推計できる。

### 【東北楽天日本一 波及効果を検証】

(2013年11月30日付)

クリスロード商店街振興組合は「パレード後、飲食店には長い行列ができた。プラス作用は間違いない」と喜ぶ

メルパルク仙台、「CSと日本シリーズ計8試合の前後はほぼ満室」

### 【東北楽天日本一効果 くつきり百貨店売上高】

(2013年12月26日付)

優勝パレード時には、お土産として名産品も動いた。

### 【東北楽天経済効果 230億円 県試算】

(2014年2月1日付)

CSと日本シリーズの直接効果は26億7000万円、各産業への波及効果は16億6000万円で、計43億3000万円の効果があった。

### 【東北楽天V地元事業者生かし切れず】

(2014年3月11日付)

2013年シリーズに記念セールや特別メニューといった協賛行事を行った仙台市内の事業者は1割未満にとどまったことが、仙台市のアンケートで分かった。7.6%。

市経済企画課の担当者は「プロスポーツを自らのビジネスに積極的に生かす意識が浸透していない」と。



写真1:大勢のファンが詰めかけた東二番町通



写真2:優勝パレードの様子

## 12.優勝パレードを終えて

12月3日、10回目の企画運営委員会が開かれ、「開催報告」「個人協賛状況」「今後の活動」などが発表された。

12月5日、実行委・鎌田会長が記者会見で、開催御礼を述べるとともに、個人協賛金受付状況や記念バッジ発送などが発表された。

そして、年度末の2014年3月28日、優勝パレード実行委員会の第4回総会が開催され、事業報告と決算が発表されて、実行委員会が解散した。

## 13.今後の課題

第1節でも触れたが、プロ野球にはリーグ優勝、CS優勝、日本シリーズ優勝と「優勝」が3種類ある。今後は「優勝パレード実施はどの優勝でやるか?」という「優勝パレード」の定義を明らかにしておく必要がある。

楽天イーグルスの場合、既に「日本一」でパレードしたのだからそれ以外ではやれないとの意見もある。地域活性化のためにはハードル下げたいところだが、今後は検討と協議を重ね、そういう下地も作っておかなければならないだろう。

そのためにも、各地で実施されるパレードの詳細を調査研究しておくことも必要だ。資金の集め方、告知の仕方なども時代とともに進化していくはずだからだ。今後の楽天イーグルスの優勝パレードの実施に当たっては、「2013年の時と同じ手法は通じないかもしれない」と想定しておくことも重要だろう。

## 第2章 プロ球団と官民支援組織の役割と成果

(4つのプロスポーツと官民一体の支援組織) —創設手法と活動例

[執筆者:清水 義明]

### 1.はじめに

プロ球団の官民支援組織の役割と成果、地域活性化の装置としての支援組織のあり方という2項目が私に与えられたテーマである。

私は仙台市の職員として在職中、スポーツに関わる職歴が非常に長く、多くのスポーツ行政に携わりながら定年を迎え、その後、仙台市スポーツ振興事業団、ベガルタ仙台役員を経て、現在、一般社団法人スポーツ・ラボ仙台の専務理事を務めている。

こうして、仙台市のスポーツ行政に携わり、たくさんの方の支援組織と関わってきたことを通じて実感したことをお伝えしていきたいと思う。

### 2.官民支援組織の設立と目的

ここで改めて官民支援組織という言葉について定義しておきたい。

言うまでもなく、「官」は役所であり、「民」は民間のことである。ここでのポイントは、役所だけではなく、多くの企業や団体と一緒に盛り上げる「仕掛け」が、この官民支援組織というものであると定義しておきたい。

なぜこのような組織が必要かという点、例えば、あるプロスポーツの支援を官だけでやると、「何で仙台市がベガルタや楽天という一民間企業を支援するんだ？」という話になりかねない。そもそもプロスポーツは地域に活力を与えてくれる“地域の宝物”と考えている。そこで、官と共に企業や団体などの民にも参画いただく支援組織を通じて、ベガルタ仙台あるいは楽天イーグルス、仙台89ERSといったプロスポーツ球団を支援しましょうというのが官民支援組織なるものの存在意義である。これは一方で、参画する民間企業や団体からすると活動の幅が広がり、地域としての大きな力になることが期

待できることでもあった。

支援組織の究極の目的は、「地域のにぎわいと活力の創出」「地域の活性化への寄与」である。

次に、官民支援組織の具体例を紹介していきたい。

#### ①ベガルタ仙台ホームタウン協議会

はじめに、2002(平成14)年4月18日の設立ベガルタ仙台ホームタウン協議会について。

設立の目的は、同協議会の規約(第1条)に「ベガルタ仙台を支援し、ベガルタ仙台とともにサッカーを核としたスポーツ文化の振興、青少年の健全育成および地域の活性化に寄与することを目的とする」と定めている。

補足すれば、地域との連携や学校へのアプローチ、サッカー文化の盛り上げなど、ベガルタ仙台が単独では成しえないことをバックアップすることに同協議会の役割があるといえよう。

#### ②楽天イーグルス・マイチーム協議会

次は楽天イーグルス・マイチーム協議会。こちらは2004(平成16)年12月27日に設立された組織で、こちらも規約(第1条)に「楽天イーグルスと密接な連携を保ちながら、地域密着型球団として仙台、宮城さらには東北に、しっかりと根を下ろすようさまざまな活動を実施し、地域振興ならびに野球をはじめとしたスポーツの振興に寄与する」と目的を掲げている。楽天イーグルスと地域とのより良い関係作りのために知恵を絞り、汗をかき、球団が標榜する地域密着を実現させることがこの目的に込められた思いである。

#### ③仙台89ERSホームタウン協議会

3つ目は仙台89ERSホームタウン協議会である。設立は2016(平成28)年9月5日。目的については、「仙台89ERSが一層多くの人々に愛され地域に密着した球団となるよう支援し、バ

スケートボールを核としたスポーツの振興、地域の活性化に寄与することを目的とする」と規約(第2条)に明記されている。

地域連携やバスケットボールを通したまちのにぎわい創出など、仙台89ERSが単独では成し得ないことをバックアップするというのが組織の目的である。

### 3.各協議会組織が取り組んだ事業

上述したような目的を掲げた各支援組織がどんな事業を行ってきたかについて簡単に紹介しておきたい。

#### ①ベガルタ仙台ホームタウン協議会の事業

ベガルタ仙台ホームタウン協議会の規約(第2条)では「1 ベガルタ仙台を支援する市民活動の拡大に関する事業」「2 ベガルタ仙台が行う地域活動等に対する支援及び協力に関する事業」「3 ベガルタ仙台の運営に対する支援に関する事業」「4 前3号に掲げるもののほか、本会の目的を達成するために必要な事業」を掲げている。

同協議会と本来クラブ自身が実施しなければならないことの多くを任意組織のベガルタ仙台・市民後援会が補完してきた。事業は協議会事務局と共に運営委員会(拡大事務局ともいえる)を設置し、具体の協議と事業実施などを行ってきた。

#### 【過去の主な事業】

- ・まち中、商店街へのフラッグ、ビッグユニフォーム掲出
  - ・地下鉄、駅広告
  - ・ユアスタ周辺清掃
  - ・七夕飾り掲出
  - ・キャンプ出発壮行式
  - ・ホームタウンフェスタの開催
  - ・チアペーパー作成配布
  - ・J2優勝パレード
  - ・アウェイゲームのパブリックビューイング
- 「キャンプ出発壮行式」は、クラブハウスや仙

台空港でキャンプに出発する選手をお見送りするイベントで、キャンプシーズンに入ると選手と市民が関わる機会が減るため、選手と地域が向き合う場として重視しているイベントである。



2015年1月12日のキャンプ出発壮行会式の様子



開幕戦や最終戦に配布されるチアペーパー

#### ②楽天イーグルス・マイチーム協議会の事業

楽天イーグルス・マイチーム協議会も規約(第3条)に「本協議会は中長期の活動方針、年間行事など各種事業を決定し、楽天イーグルスを応援する企業、団体、グループ等とともに事業を行う」と定めている。

地元有力企業に参画を要請し、幹事社(10万円/年)として年2回開かれる幹事会での各種報告や審議に参加していただいている。また、協議会事業で関連する分野での特段の助力をお願いすることも多い。運営組織として協議会の発起人社による「事務局団会議」を設け、企画・活動の中心としてきた。

#### 【過去の主な事業】

- ・商店街へのポスター(1万枚)掲出
- ・まち中、商店街へのフラッグ、ビッグユニフォーム掲出

- ・宮城県内外の支援組織同士の意見交換会
- ・「北海道日本ハムを応援する会」との交流会
- ・久米島町訪問団受け入れ
- ・久米島マルシェ
- ・まちいこスタンプラリー
- ・日本シリーズ優勝パレード
- ・ガリバーオールスターゲームパブリックビューイング
- ・キャンプ出発壮行式
- ・シーズン激励報告会
- ・応援デーの開催



まち中のフラッグ



楽天イーグルス優勝パレード(2013年11月24日)

キャンプ出発壮行式はベガルタ仙台と同様、選手・球団と地域が向き合う場として重要視してきたイベントである。また、激励報告会はシーズン終了後の球団側からの報告と地域の慰労・激励の場として設けられている。球団が毎年、社長以下数人の選手を派遣してくれている。協議会会員だけに参加を呼び掛けて開催してきた。

「応援デー」は札幌の日ハムを応援する会を

参考にした企画で、マイチーム協議会という大きな組織体に特別価格で参加を呼び掛けて大応援団(観客)を送り込もうというものだ。球団側には特別価格を提示してもらうが、集客に苦勞しそうな試合で設定することになっている。仙台市役所関連職員だけで1万人、その他地元有力企業、商店街、バス協会や観光連盟などの業界団体など幅広い会員への直接の呼びかけで一シーズンで数千人を動員してきた。

### 仙台89ERSホームタウン協議会の事業

仙台89ERSホームタウン協議会の事業については、規約(第3条)で「(1) クラブの取り組む事業への支援及び応援機運の醸成に関すること」「(2) バスケットボールを中心とした地域スポーツの振興に関すること」「(3) クラブを核とした地域・経済の活性化に関すること」「(4) 青少年の健全育成に関すること」「(5) その他協議会の目的を達成するために必要なこと」の5項目を定めている。

協議会では地元有力企業や大学などに参画を要請し、31団体で組織を構成している。会長1、副会長7、顧問2、会員17は負担金または会費を徴収(幹事2、オブザーバー2は会費なし)。年1回の幹事会では、各種報告や審議に参加してもらい、事業を効果的に実施するため、企画立案などを審議する運営委員会にはボランティアも参画し、活動の核としてきた。

なお、仙台89ERSがbjリーグ誕生と同時に参入した2005(平成17)年秋、官民支援組織の「仙台89ERSとともにまちづくりをすすめる会イエローブースターズ」を立ち上げ、その後「仙台89ERSサポート協議会」に改組、さらに現在の「仙台89ERSホームタウン協議会」に改めている。こうして、段階的に組織を強化し、深化してきたのである。

特に「ホームタウン協議会」に改組した背景を述べておく。

2015年に新リーグ(Bリーグ)参入の申請手

続きがあった。経営計画や地域の支援体制などをリーグに説明する必要があった。この時、地域の支援姿勢を示す支援組織の組織建てを強化する目的でプロ野球やJリーグと同等の官民支援組織に昇格させようとした。サポート協議会の発展的解消、2016年9月にホームタウン協議会設立総会へと続く。

#### 【過去の主な事業】

- ・長町へフラッグ、のぼり旗掲出
- ・地下鉄駅への広告
- ・横断幕設置(クリスマスロード)
- ・イエロープロジェクト(花壇設置)
- ・長町商店街スタンプラリー
- ・商店街での激励会
- ・七夕飾り掲出(クリスマスロード)
- ・アウェイゲームのパブリックビューイング

仙台89ERSは野球やサッカー球団に比べてコンパクトなので関連イベントを街中で開催できる。アーケード街や大型ショッピングセンターで可能で企画を実施しやすい。今後も知恵を絞りチームも商店街側もメリットのあるものを企画していってほしい。



長町に掲げられたフラッグ(2019年9月24日)

#### 4. 各支援組織の構成と役員等

ここからは各支援組織の構成と役員等の体制面について述べていきたい。

#### ①ベガルタ仙台ホームタウン協議会の体制

はじめにベガルタ仙台ホームタウン協議会であるが、構成については、規約(第3条)で「協議会は、第1条の目的に賛同する個人、法人及び団体による会員をもって構成する」と定め、年会費の設定はない。役員については、規約(第4条)で「協議会に、次の役員を置き、会員の中から総会において互選する」と定めており、具体的な構成は以下のとおりである(顧問に関する規約は第5条)。

---

会長1名: 仙台市長

副会長2名: ベガルタ仙台、市民後援会会長、  
仙台市文化観光局長

監事2名: 仙台青年会議所理事長、泉青年  
会議所理事長

顧問: 知事、県議会議長、市議会議長

---

地元有力企業、サッカー協会、商工会議所、泉中央活性化関係者などで構成された幹事会を設置、事務局は仙台市であるが、事業計画などは運営委員会で企画・実施する形態とした。メンバーは、仙台商工会議所、河北新報社、ベガルタ仙台、宮城県サッカー協会、支援組織などの実務者が参画している。

こうした組織編成と運営方法は、その後設立された楽天イーグルス・マイチーム協議会や仙台89ERSホームタウン協議会のモデルとなって活かされていったといえる。

#### ②楽天イーグルス・マイチーム協議会

次に、楽天イーグルス・マイチーム協議会であるが、会員は規約(第4条)に「本協議会に会員は、第1条の目的に賛同する団体・企業等とする」と規定され、年会費が設定されている。役員については、規約(第6条)で「本協議会に次の役員を置く」と定めている。具体的な構成は以下のとおりである(顧問に関する規約は第7条)。

---

会長1名：仙台商工会議所会頭  
副会長若干名：河北新報社社長、JR東日本東北仙台支社長、楽天野球団社長  
監事若干名：仙台観光国際協会理事長、仙台青年会議所理事長  
顧問：県知事、仙台市長

---

上記の組織編成について説明すると、地元有力企業が参加する幹事会を置き、その下部組織として、役員社の河北新報社、JR東日本、顧問の仙台市、宮城県、監事社から実務担当者と事務局の仙台商工会議所からなる「事務局団」を置き、企画・活動の核とした点に特徴がある。

また、組織内に地域振興部会を置いて、特に仙台市内中心部商店街との関係づくりを行うとともに、応援委員会を設置して応援ルールづくりを行い、ボランティア部会を設置してボランティアを希望する市民と球団との橋渡しを担った。

### ③仙台89ERSホームタウン協議会

次は仙台89ERSホームタウン協議会である。会員については、規約(第4条)に「協議会の会員団体は、第2条の目的に賛同する団体・企業等とする」と規定されており、年会費が設定されている。役員については、規約(第6条)で「協議会には、次の役員を置く」と定めている。具体的な構成は以下のとおりである(顧問に関する規約は第9条)。

---

会長1名：仙台市長  
副会長若干名：宮城県バスケットボール協会会長、河北新報社社長他  
監事2名：仙台商工会議所青年部、仙台市バスケットボール協会会長  
顧問：県知事、仙台商工会議所会頭

---

組織および活動の特徴としては、地元の企業などによる幹事会、その下部に運営委員会

を置き、事務局の仙台市スポーツ振興事業団と共に企画・実施を行っていること、仙台市太白区長町地域を拠点にしていることもあり、当該地区の商店街や町内会などとの連携に力を入れて活動していることなどが挙げられる。

### ④仙台プロスポーツネット(参考)

最後に参考として2007(平成19)年4月に設立された仙台プロスポーツネットを紹介しておきたい。

仙台は3つのプロスポーツの本拠地があり、それぞれの球団に官民一体となった支援組織が存在する日本唯一の都市であることを背景に仙台プロスポーツネットは誕生した。

その主な目的は、各支援組織が持つ知識、機能、情報、事業を連携させることにより、各支援組織だけでは達成し得ない効果をもたらすとともに、3球団の連携を進め、仙台のプロスポーツを日本全国に発信し、さらなる地域密着、相互の活性化を図ることにある。

#### 【活動の特徴】

仙台に本拠を置くプロスポーツ球団はそれぞれ地域戦略が異なっているため、共同事業がしづらい状況にある。そこで、3球団のオブザーバー参加のもと、仙台市スポーツ振興課が事務局となり、各球団それぞれの支援組織である楽天イーグルス・マイチーム協議会、ベガルタ仙台ホームタウン協議会、イエローブースターズ(当時)の3者が参加し、各球団の地域戦略を妨げない範囲で、支援組織が主体となった3球団連携を推進する試みを行った。

主な活動実績は次表に示すとおりであるが、つまりは野球もサッカーもバスケットボールもセットで楽しむような形でイベント事業を展開した。2023年にスポーツコミッション仙台に統合する形で発展的解消を図ったところである。

活動実績

2007年 6月	仙台プロスポーツネット設立記念シンポジウム「プロスポーツと地域」
2007年 7月	サマースポーツフェスティバル「ガリバーオールスターゲーム&ベガルタ仙台パブリックビューイング」
2007年 9月	ベガルタ仙台&楽天イーグルス観戦企画：観戦満喫バック、観戦おためしバック
2007年12月	第3回せんだいプロスポーツフェスティバル：フォト&絵画コンテスト、せんだいプロスポーツから読み取り募集、スタジアムDJバトル
2008年 4月	4.12仙台のプロスポーツを応援する同日観戦バック No.1「仙台バーサス大阪」楽天戦+仙台89ERS戦 No.2「地下鉄シリーズ」ベガルタ戦+仙台89ERS戦
2010年 3月	第5回せんだいプロスポーツフェスティバル：チアリーダーパフォーマンス、応援ファッションショー、体感型スポーツパークほか
2010年 4月	指導者クリニック
2014年 2月	ボランティアマナー講習会

これらの活動について少し補足説明をしておきたい。

2007年9月のイベントは、ベガルタ仙台と楽天イーグルスの試合を同じ日に両方観る企画として実施したものである。新聞記事になったほど話題になったイベントである。イーグルスの試合の後、ベガルタ仙台の試合会場へ移動するバスの中で応援ユニフォームを着替えるという面白い光景も見られた。この2試合観戦バックは2008年4月、楽天イーグルスに89ERSをセットにした形でも実施している。

3つのプロスポーツチームのスタジアムDJによるトークバトルも好評で、こういうことは3つのプロスポーツのある都市ではないとできない試

みだろうと思われる。そのような意味で、3つのプロスポーツチームは仙台の宝物だという認識で、われわれはさまざまなPR活動やイベント開催にも取り組んできたところである。

## 5.支援組織の成果と課題

### ①多様な波及効果としての成果

市民が日常の中で、生き生きとスポーツを楽しむ、スポーツボランティアなどの活動を通じて支えあい、応援することで感動を分かち合う。そしてプロスポーツを通じて市民、行政、企業や団体がひとつのチームとなり、地域の活性化の実現を図るという土壌が仙台にできあがってきているといえる。

プロスポーツとその支援組織の活動は、地域経済への貢献、交流人口の拡大にもつながっていると考えられる。そこで、われわれの支援活動が、プロスポーツの経済波及効果と観客動員数にも少なからず貢献しているという自負と前提の下、この2項目について、宮城県の集計データをここに紹介しておきたい。

これらの数字で見て、支援組織がどれだけ具体的に貢献しているかについては計り難いものの、地元プロスポーツチームへの関心が高まっていることは事実である。

2020(令和2)年度に実施された「仙台市スポーツに関する意識調査」によると、地元プロスポーツチームに対する関心の有無を見ると、「大いに関心がある」「まあまあ関心がある」が

経済波及効果(宮城県HPから/単位:円)

	2006年	2010年	2016年	2023年	2024年
楽天イーグルス	97億	138億	213億	178億	224億
ベガルタ仙台	26億	25億	24億	19億	22億

観客動員数(宮城県HPほか/単位:人)

	2006年	2010年	2016年	2023年	2024年
ベガルタ仙台	346,868	330,287	287,839	235,521	253,294
楽天イーグルス	905,820	1,067,334	1,517,680	1,292,028	1,553,915
仙台89ERS	44,080	37,908	72,568	131,194	130,748

6割を占めた。

一方、スポーツボランティアの活動について見ると、「活動したことがある」が約3%である。スポーツボランティア登録者数(ボランティアステーション)は、2019(令和元)年の337人から2025(令和7)年は1,654人と登録者数が大幅に伸びたことから、スポーツボランティアに関心を持つ人が増えてきているのが数字に表れている。支援組織の大きな効果というのはこのスポーツボランティアの増加が一番ではないかとさえ思えるほどだ。

その他、「プロスポーツによる東日本大震災からの復興キックオフデーの調整がスムーズに行うことができた」とか「構成メンバーに各分野の実務者を参画させることにより、化学反応で大きな成果が期待できる」などといった声もある。後者については、「こんなことができるのでは?」というような1つのアイデアが、各分野の実務者が参画することによって、「そうだよ、それとそれ結びつけてやりましょうよ」というように、想定しなかったことが実現可能となりやすいということを意味しています。これも支援組織のメリットであり、評価できる点だと考えられる。

また、スポーツボランティア支援活動を展開する中で、「県道、市道への応援フラッグ掲出が許可されやすい」「各球団からチケットの割引が受けやすい」といったことも増えているようだ。前者について補足すると、県道や市道の街路灯などにフラッグを掲出する場合、楽天イーグルスあるいはベガルタ仙台の名前では、掲出が許可されないことも多い。フラッグに支援組織の名前や自治体の名前を併記することで受け入れていただきやすくなるのである。

こうした有形無形のメリットがあるという点からしても、支援組織の存在と活動が、多様な波及効果をもたらしていることが容易に想像できよう。

2011年4月29日は特別な日だった。東日本大震災からの「復興キックオフデー」だった。こ

の日は楽天イーグルスもベガルタ仙台もホーム開幕戦であり、東北新幹線、仙台市地下鉄が全線再開とも重なった。地下鉄などは開幕戦に間に合わないと言われ、観客をスタジアムまでどう運び込むか心配されたが、奇跡的に間に合い、試合も両チームが勝利した。これに先立ち知事の「復興キックオフ宣言」により宮城県民に再スタート、前に進む意識を持ってもらおうと宮城県に要望し、実現した。この時ほどスポーツの力を感じたことがない。

## ②残された課題とこれからの展望

各球団創設期は、支援組織がまさに市民によるバックアップ組織として機能してきた。

その後、各支援組織設立から年月が経過し、単に球団と地域を結ぶメッセンジャー的な役割だけでなく、支援組織が地域課題や市民の要望を球団や自治体に伝えたり、その実現に汗をかいていかなければならない存在となってきた。

つまり、各支援組織がこうした重要な役割をいかにして担っていくかが、今後の課題となってきたのだ。

また、球団関係のキーパーソンが代わった場合や、行政の人事異動に伴う窓口機能などに変化があった場合、われわれの組織の継続性をどう保持していくかということも、常に考えておかなければならない課題である。

さらに、予算の確保にも課題を残している。行政の負担金がいつまで続くか、会費の徴収をどうするかなど、もともと独立採算は不可能な支援組織であるがゆえに、この点は各支援組織共通の大きな課題であり続けるといえる。

このように特に2005年から活発化したプロスポーツ及びその支援組織の活動の進化形が「スポーツコミッションせんだい」である。その詳細説明は別の機会に設けたい。

# 第3章 つなぎ、支え合い、共に創る、仙台・宮城のスポーツボランティア

【執筆者：泉田 和雄】

## 第1節 ボランティアのはじまり

### 1.はじめに

仙台に拠点を置くプロスポーツや、規模の大きいスポーツイベントではたくさんのボランティアが活動している。実はそれは当たり前のもではなく、全国各地の都市の中でも稀有な事例であり、長い時間をかけて多くのスポーツ主催者や参加する市民、それをつなぐさまざまな人々によってつくられ育てられ続てきたものである。スポーツを「支え合う」文化がどのように作られてきたのかをまとめてみたい。

### 2.派遣型から市民参加型へ

1998年のシーズン開幕と同時にサッカーのブランメル仙台（現在ベガルタ仙台）でのボランティアが始まった。その背景には財政的な課題もあったが、当時JFLのチームでもボランティア制度を採用している所が多くあったことや、翌年からJ2がスタートするという事も影響したと思われる。

この時期、スポーツは受難の期間で、さまざまな実業団チームが経営母体の不振により廃部となることが多く、その影響はサッカーにも及んでいた。鳥栖、平塚、福岡など地方のクラブの経営問題が表面化、「横浜フリューゲルス」と「横浜マリノス」の統合も話題となった。当時ブランメル仙台には、多くの累積赤字があり、ボランティア募集をしたのはチームだったが、応募した人々の中には「チームを無くさないこと」、それを目的に参加した人も多くいた。

最初の1年はボランティアとはいいいながら、内実は企業や学校、そして行政などからの派遣された人が大半であった。J2が始まった1999年からは派遣型は減少し、市民参加のウェイトが年々アップしていった。リーダー制度が定着

し、経験がマニュアル化（現在ではボランティアハンドブックとして毎年更新されている）されたり、自主的な研修会も増え、チームと連携し他チームへのバスでの「応援研修」も実施されたりした。また、この年には「ベガルタ仙台市民後援会」も発足し、スタジアムの内外での支援活動を現在も展開している。

### 3.ごみ問題に“仙台方式”で対応

ボランティアの取り組みで象徴的だったのが、ごみの分別とリサイクルの推進取り組みだった。初めてJ1に昇格した2001年、昇格が現実になりつつあるとともにスタジアムは満員となり、それまでゲーム終了後30分で終わっていた清掃活動が、ごみの増加に伴い1時間たっても終わらなくなったことが発端だった。オフシーズンに環境NGOの方々と打ち合わせを実施。2002年のシーズン開始時にごみの内容の分析を行い、当時多かった紙コップを重ねて回収したり、ペットボトルなど資源ごみの分別を進めたりした。観客も協力的で、シーズン途中からはリユースカップの導入、レジ袋の廃止などにステップアップ。やがて清掃業者とも連携し、分けたごみのリサイクル、リユースが始まったのである。

その後“仙台方式”と呼ばれることになるこの活動は、市内の全てのプロスポーツイベントやまつりなどにも広がり、現在では共通した分別方法が定着している。その普及啓発に大きな力を発揮し、中心的な役割を果たしたのはベガルタ仙台ボランティア<sup>※1</sup>であった。

（脚注）

※1ベガルタ仙台ボランティア：1997年にベガルタ仙台ボランティアの募集を開始し、98年にボランティア登録をして、活動を開始。2000年ベガルタボランティアリーダー制を導入。03年財団法人みやぎ・環境とくらし・ネット

参考WEBサイト



ワーク(MELON)の協力を得て、スタジアムごみ減量作戦の取り組みを組織的に行う。ボランティア活動を通じて、社会性を高め、ベガルタ仙台をサポートする仲間の輪を広げながら、現在に至る。

## 第2節 サッカーワールドカップがやってくる

### 1. 市民参加型のサポートメンバーを募集

2000年に入り、このころのスポーツ界の話題の一つが「サッカーワールドカップ」であった。各地に巨大なスタジアムが次々に完成し、ボランティアに関する話題も数多くあった。宮城も開催地の一つだったものの、地域全体としては決して盛り上がりはなかった。そこで、宮城県の推進委員会が募集したのが、市民からワールドカップの機運の醸成と周知の活動をするサポートメンバーだった。この取組は他地域と比較しても、市民参加型の前例の少ないものであった。

### 2. 「キックラブ」の通称で市民の間に浸透

こうして市民によって組織されたのが、「ワールドカップ宮城・仙台友の会」である。やがて「キックラブ」の通称名で呼ばれるようになり、市民の間に浸透していった。組織の目的は下記のようなものだった。

ワールドカップを皆さんの手で盛り上げるために各種事業の企画・実施を行います。

- ・FIFAワールドカップ宮城開催の広報事業
- ・会員相互の交流を図るための事業
- ・会員からの企画募集など

ワールドカップ終了時までの期間限定の組織ではあったが、集まったメンバーから事務局的な役割を務めるメンバーを募り、最初は自分たち自身が学び合うことからスタート。その後は、メンバーで意見を出し合い、ワールドカップ

関連のシンポジウムやパネル展の開催、仙台がキャンプ地となったイタリアチームの関連企画として、留学生を集めての国際交流フットサル大会を開催するなど、できる限りお金をかけずにさまざまな活動を展開した。

### 3. 機運を盛り上げる活動を展開

2002年のワールドカップ開催期間中には、仙台市内の「サッカーパーク」という交流スペースにキックラブのブースを設置し、無料でフェースペイントをしたり、会場となる宮城スタジアムの芝を乾燥させてお守りを作ってプレゼントしたり、参加国のあいさつの言葉をミニリーフレットにしたり、サッカー神社を設置したりと、キックラブに参加した市民が自分たちで考えた企画を形にすることに取り組んだ。

大会はやがて終わったが、当時の体験や想いはレガシーとして残り、それを共有し、引き継ぐ形で2003年、宮城スタジアムに「グランディ・21ボランティア」が誕生した。そして、翌2004年には、さらに幅広いスポーツをサポートする「市民スポーツボランティアSV2004」が組織されたのであった。

次に、これら二つの組織について、順に述べていきたい。

### 4. スタジアムボランティアの立ち上げ

2002年のサッカーワールドカップの日韓共催の大会が終った後、キックラブのメンバーは、総括のシンポジウムの準備をしながら、発足当初から考えてきたことを形にしていく活動を始めていた。その一つが、ワールドカップの会場となった「宮城スタジアム」を拠点にしたボランティア組織を立ち上げようというものであった。

実は、Jリーグクラブのボランティアとは別組織のいわゆる“スタジアムボランティア”の立ち上げの動きは埼玉、横浜、静岡、札幌、大分、新潟など、他のワールドカップ開催スタジアムで

もあった。だが、現在ではJリーグクラブのボランティアはあるものの、スタジアム自体で組織され活動するボランティアは、横浜と静岡と宮城のみとなっている。

## 5. グランディ・21ボランティアがスタート

2002年のワールドカップや前年の国体で使用された宮城スタジアムは約270億円の建設費がかかっており、4.9万人の収容人数である。しかし、建設当時から交通アクセスの悪さが指摘されており、その影響で2002年以降の利用率は低下すると予測されていた。

せつかくの施設をより良い形で活用していくため、ボランティア組織を起ち上げ、たくさんの市民・県民が利用しやすく身近な施設とすることが重要だと考えた。また、そこで開催されるスポーツ大会を支えることも含め、市民レベルでできることを県のスポーツ関係者とともに検討を重ね、2003年、「グランディ・21ボランティア」がスタートした。

設立から20年あまり経た現在も、活動の大枠は発足当初と大きくかわらず、施設の見学案内や、大会の運営サポート、周辺の案内などがありコンサートも含めて、大規模イベントではなくてはならない存在となっている。また、県内のスポーツボランティアが利用可能な「ボランティアセンター」があることも大きな特色となっている。

## 6. SV2004の発足と活動の理念と目的

2004年9月、これまでの経験をもっと幅広いスポーツのサポートに役立てることを目的に、市民型・多種目型のボランティア組織として「市民スポーツボランティアSV2004」（以下「SV2004」と呼ぶ）が発足した。「SV」は言うまでもなくスポーツボランティアの略称であり、これに発足年を加えた名称である。

市民有志で立ち上げたことから「市民スポーツボランティア」を冠し、「市民スポーツボランティアSV2004」を正式名称とした。

「スポーツでまちを元気にする」を基本理念とし、目的として「スポーツをより楽しくコーディネートし、ネットワークを通じて環境改善にも取り組むことで、スポーツの振興とスポーツに関わる人々の社会的認知を高めることに貢献します」と定款に定めた。

特徴的なのは、スタート段階からの大きな活動テーマとして、活動を楽しむことを大事にし、そのための環境を作ること、人材育成のための研修、全国の仲間との交流、スポーツを通じたネットワークづくり、情報発信や活動の記録、エコ活動の推進などを掲げたことであった。

自主性と自立性を守るために団体への登録条件として会費制とし、年会費は1,000円（学生は無料）。通信費や会議費、資料代などを考慮し設定した。資金がなくても「身の丈での活動でよし」としていたため、この会費は現在も変っていない。

幸いなことに、発足後すぐに宮城県ラグビーフットボール協会から、トップリーグの試合運営に対するサポートの依頼があり、活動の場が生まれた。この取り組みからSV2004とラグビー協会の関係は強く、2019年のラグビーワールドカップの開催地招致の活動や、その後の釜石開催のサポートまで、現在も継続的にサポートのための活動が続いている。

## 第3節 プロスポーツを支える市民ボランティア

### 1. 経験とネットワークを持つ組織として

2004年9月のSV2004の発足は、後から思えばここしかないタイミングでのスタートであった。

それは関西で起きたプロ野球チームの統合問題で、紆余曲折があり仙台に新球団が誕生する可能性が高まっていたからである。もう一つは2005年にプロバスケットの仙台89ERSがbjリーグという新リーグで参戦するというも

ので、こちらは比較的早く11月にはボランティア立ち上げの打合せが始まっていた。相手から見ればフリーの市民組織というのは珍しいことや、一方で、さまざまな経験とネットワークを持つ組織として期待されたものと思われる。

## 2. プロ野球初のボランティア誕生

2004年11月2日、正式に東北楽天ゴールデンイーグルス(以下、「楽天イーグルス」と呼ぶ)が仙台に誕生した。実は仙台には過去(1974年から1977年)にロッテが本拠地とした時期があったものの本格的に地域に根差すことはなく、短期間でチームを失った苦い思い出があった。そのため、今回は行政や地元商工会などの対応は早く、プロ野球初のボランティア構想も早い段階で生まれていた。

チーム誕生が決定すると、SV2004として新球団に対しボランティア制度創設の提案を行い、一方では官民一体の球団支援組織である「楽天イーグルス・マイチーム協議会」の中の「応援・ボランティア部会」を舞台に、立ち上げのための検討も重ねた。その結果、12月には、球団スタッフとボランティア制度の概要についての話し合いがスタートしている。

規模の大きい、しかも過去に経験してきたサッカーやラグビーのイベントと違ってゲーム数も多く、連戦もあれば終了時間もはっきりしないスポーツということもあり、活動内容を決めて、募集要項をつくり、細かい点を一つ一つ決めていくことはなかなか難しい作業であった。2005年の1月から3月は、ほぼ毎週のように打合せを重ねた。球団は、「地域密着」という狙いを実現する方策の一つが「市民参加」である、という考え方であった。さまざまな不確定要素がある中で、ボランティアがどれだけ集まるかもわからないだけに、無理のない形で立ち上げることが求められ、こうして誕生したのが「楽天イーグルス・ボランティア<sup>\*2</sup>」だった。

(脚注)

※2楽天イーグルス・ボランティア:2004年10月の球団創設時の目標である「地域密着の実現」を目指し、設けられたプロ野球界初のボランティア制度。組織の運営には「市民スポーツボランティアSV2004」のほか、「公益財団法人みやぎ・環境とくらしネットワーク(MELON)」が参画、医療ボランティア活動をNPO法人救命救急と医療安全を学び実践する会が応援している。

参考WEBサイト



## 3. 楽天イーグルス日本一をボランティアが支える

プロ野球で最初のボランティアであることで、無理のない活動内容を考えるに当たって参考にしたのは、ベガルタ仙台の取り組みだった。とりわけ大きな成果をあげていたエコ活動については、ぜひとも導入したいものだった。時間との戦い(実質3か月ほどの準備期間)だったが、エコ活動とゲームがない日の球場の見学案内の活動に絞り込み、スタートすることになった。

現在も楽天イーグルスのボランティア活動は3つの団体がサポートしており、ボランティア活動全般をSV2004が、エコ活動をみやぎ環境とくらしネットワークが、そして、医療ボランティア活動をNPO法人救命救急と医療安全を学び実践する会が支えている。

楽天イーグルスは、2013年には日本一になり、市内での優勝パレードでのボランティア活動も行った。また、オールスターゲームの際も、全国からボランティア仲間が集まっていただき、活動を行うことができた。

## 4. プロバスケットボールでのボランティア活動計画

「どうスポーツのボランティア活動をデザインするか」を考えると、やはり一つのスタンダードが大切になる。2004年、プロバスケットの新チームが仙台に発足するということが決まり、翌年の開幕に向けてボランティア組織の立上のための話し合いが始まった。

それまでの実業団主体のリーグに満足せず、Jリーグクラブのように地域に根差したプロ化をめざすbjリーグの誕生、その6クラブのうちの

一つが仙台を拠点とする仙台89ERSであり、2005-2006年シーズンからのスタートに向けてボランティア組織の立ち上げが計画された。

仙台のスポーツボランティアは、ベガルタ仙台、楽天イーグルスがあり、グランディ・21ボランティアとSV2004が既に活動していた。そこには共通する一定の活動基準も生まれていた。

それは、「楽しく」「主体的」に活動する環境を作ること、エコ活動は仙台方式といわれる一つのルールに基づいて行うこと、参加者の負担をできる限り軽減すること、ボランティアのケアの仕組みを作ることなどであり、バスケットボールのボランティア活動も、これらの基準をもとに組み立てることとなった。

現在までこうした基本は変わらず、その結果、他の地域のBリーグのクラブのボランティア活動とは、いくつかの相違点が生まれている。

その最大の違いは他のチームの大半で実施されている「設営・撤収」をしていないことにある。これは、活動開始当時の仙台のボランティア活動時間が6～7時間であり、ゲーム運営のもてなしに特化することが、募集の際に重要と考えられたため、当然、設営と撤収は学生やアルバイトが担うことになるが、ボランティアメンバーの負担が少ない活動時間にした結果、他チームに比べ継続率も高く、現在でも毎年100人以上の登録者を確保できている。

## 5.ハンドブックの作成とボランティア運営の体験

SV2004として最初に取り組んだのは、スポーツボランティアの研修ツールとしてのハンドブックづくりであった。2005年に何度か実施した研修会の資料をもとに心構えやマナー、そして、活動の柱の一つだった「エコ活動の基本」をまとめたものだ。第1版を2006年に、第2版を2010年に、第3版を2014年に発行し、SV2004のウェブサイトのトップページの下に掲載した。

2006年で一番規模の大きかった活動は

「FIBA世界バスケットボール選手権大会」の活動であった。「バスケットのワールドカップ」と呼ばれ、8月の暑い期間にエコ活動を中心にサポート、単発型のイベントのボランティア運営を任されるという意味で貴重な体験となった。

忘れられないイベント体験がもう一つあり、各地の仲間の交流機会として2005年の山形からスタートし、2006年に新潟で開催した「東北スポーツボランティアサミット」を2007年2月に「第3回東北サミット in 仙台」として宮城で初めて開催した。会場は宮城スタジアムで、2日目には楽天イーグルスの球場見学も実施。生まれて間もない組織にとっては、モチベーションアップにつながる活動を体験した。

## 6.「エコ活動」で一足早くSDGsに取り組む

2007年、SV200のこの年の最も大きな活動は、プロ野球のオールスターゲームであった。7月21日、仙台で初めてのイベントに臨み、これまで取り組んできた「エコ活動」を全国に紹介するため、球場内にボランティアテントを設置した。

この活動も参考となり、2008年から日本プロ野球(NPB)が「グリーン・ベースボールプロジェクト」というテーマで、エコなどに取り組む活動の起ち上げにもつながった。今日のSDGsへの取り組みを先取りするような活動といえる。

また、SV2004は、この年仙台近郊の泉ヶ岳を舞台にマウンテンバイクのレースや山岳マラソンを行う「泉ヶ岳アウトドア・フェスティバル」のボランティアに初参加している。朝6時に山の中腹に集合し、給水などの活動を行った。

さらに、スポーツボランティアの初心者のための入門講座なども開催しており、これは現在も続いている。

こうした活動は、プロスポーツなど4団体との連携しながら発展を遂げ、毎年「スポーツボランティアマッチング<sup>\*3)</sup>(主催:スポーツコミッションせんだい<sup>\*4)</sup>を開催するなど、現在も継続している。



スポーツボランティアマッチングの様子



スポーツボランティアマッチングとは？

スポーツボランティアに興味がある方とボランティアを必要とする団体やイベントが出会うきっかけとなるイベントです。あなたにぴったりの活動に出会えるかも！？

**開催概要**

日時：令和7年6月21日（土） 13：00～15：30  
 場所：東北学院大学土樋キャンパス ホーイ記念館 H203教室  
 対象：中学生以上どなたでも  
 定員：先着100名  
 応募方法：①せんだいスポーツボランティアステーション  
 ②Googleフォーム

募集期間：令和7年5月15日（木）～令和7年6月13日（金）

**参加団体（予定）**

ベガルタ仙台、楽天イーグルス、仙台89ERS、マイアヒと仙台レディーズ  
 リガーレ仙台、フールド・ド・東北、スペシャルオリンピックス日本・宮城、クラウン21  
 市民スポーツボランティアSV2004、せんだいスポーツボランティアステーション

**お問い合わせ**

スポーツコミッションせんだい事務局（公益財団法人） 仙台市スポーツ振興事業団内  
 住所：仙台市青葉区緑町1丁目3番9号 TEL：022-215-3209 MAIL：morimiyako@cs.sendai.jp  
 主催：スポーツコミッションせんだい 協力：市民スポーツボランティアSV2004

2025年のフライヤー

（脚注）

※3 スポーツボランティアマッチング:スポーツボランティアの活動に関心がある方々に対し、プロスポーツや単発のスポーツイベント、障害者スポーツ団体などのボランティアを必要とする組織が、自分たちのところで行われているボランティア活動を紹介し、個別の質問や相談、登録などを受け付けるイベント。現在は「スポーツコミッションせんだい」が主催団体となり、市民スポーツボランティアSV2004が共催として毎年定期的に開催されている。

※4 スポーツコミッションせんだい:2014年12月、スポーツによる街の活性化、地域のスポーツ振興、スポーツを支える力の強化を事業内容に掲げて発足した仙台市長を会長とする任意団体。

## 7.他地域での体験から学ぶ

プロスポーツ3チームでボランティアが活動していても、まだまだボランティアの社会的な認知度は高いとはいえない。SV2004の活動5年目となった2008年はそんな状況であった。

イベントとしては北京五輪の壮行試合となった女子ソフトボールの大会があった。完成して間もない仙台市宮城野区の仙台市民球場を舞台に、カナダとオランダ、そして日本が総当たりで戦った。その後、本番のオリンピックでは、日本代表が金メダルを獲得した。

バスケットボールでは、有明でのbjリーグプレーオフのボランティアに仲間たちと一緒に参加し、ボランティアの組織、指示系統、運営の在り方について学んだ。

## 第4節 仙台で全国とつながっていく

### 1.バスケットのオールスターゲーム

2009年、この年は宮城のスポーツがとても元気な1年だった。サッカーのベガルタ仙台が2度目のJ1昇格を果たし、野球の楽天イーグルスは創設以来、初めてクライマックスシリーズに進出。そしてバスケットボールの仙台89ERSは、オールスターゲームを開催した。

そのオールスターゲームの開催は2010年1月であった。振り返れば、そのための打ち合わせは2009年4月にスタートしていて、ゲーム運営サポートだけではなく、SV2004では行政などと連携し、ゲーム前日に「bjリーグホームタ

ウン・ミーティング」を開催。全国各地のリーグ関係者やボランティアが集り、さまざまなテーマで意見交換を行い、親睦を深めた。その数は130人以上、参加してくれたボランティア仲間と共に、翌日のオールスターのゲーム運営をサポートし、約6千人の観客を無事に迎えることができたのが何よりも喜びであった。

## 2.「スポーツリレートーク」がスタート

2010年は、外部からの依頼なども増え始め、宮城でのスポーツボランティアへの関心が高まってきた時期であった。

その年の5月、毎年こどもの日に開催される宮城スタジアムのピッチ開放のイベントでは、芝生のコートでさまざまなボールを使って遊んでもらったり、見学案内をしたり、いろいろなスポーツのボランティア仲間を集めて、交流企画としてドッジビー大会も開催した。

さらに、この年のトピックは「スポーツリレートーク<sup>※5</sup>」がスタートしたことであった。地元のスポート界のキーマンに講師をお願いし、平日の夜にじっくりお話を聞くというもので、最初は会員向けの企画であったが、やがて県外から講師を迎えたり、一般にも開放したりすることで聴講者も確実に増えて、100人規模となる回もあり、初年度は7回開催した。

この企画を通して得られた一番のレガシーは、ボランティアを取り巻くネットワークが自然に作れたことであった。講師をしていただく方々と一定の関係が生まれ、相手のことを知るだけでなく、ボランティアのことを知っていただく機会にもなった。いうまでもないことであるが、スポーツボランティアは活動の場があつてこそ存在といえる。何度かの中断をはさみリレートークは現在も続いている。

(脚注)

※5 スポーツリレートーク:地域のスポーツに関わる方々からいろいろな話を聞くことで、ボランティアの活動の参考するためSV2004が2010年に始めた活動。平日の夜に公共施設の会議室に、ボランティ

アで協力いただける大学・プロスポーツ・メディアなど多彩な方々を講師としてお招きし、前半1時間程度の講演と質疑や意見交換を行うというもので、記録集も作成。本来は勉強会であるが、より気軽に参加できるように飲食自由とした。講師の方々にSV2004の活動を知っていただく機会ともなり、活動の発展にもつながっている。

## 3.震災後の祈り、願い、決意

一瞬で全てが変わる大規模自然災害。特に地震は予測できないだけにそう感じる。さらに、津波や原発の放射能の爪痕など、2011年の東日本大震災の影響は今も消えない。

東北に限らず、全国のスポーツが動きを止めたあの日。ボランティアもまた、その日その日を生きることで必死だった。やがて、さまざまな支援と多くの人々の力でライフラインが回復しはじめた。

ベガルタ仙台は同年4月29日、震災後初めてホームで、J1リーグの浦和レッズ戦を行った。仙台市民や宮城県民にとって大きな意味を持つ日となったことから、村井嘉浩宮城県知事はこの日を「震災復興キックオフデー」と名付けた。29日は楽天イーグルスも震災後初のホームゲームを行った。こうしてそれぞれホームゲームを開催し、どちらも満員となった。祈り、願い、決意、いろいろな思いが交錯した光景がそこには感じられた。

この日はスポーツイベントのみならず、東北新幹線の仙台ーノ関間の運転が再開し、全線が復旧した。さらに、仙台市営地下鉄も台原ー泉中央間が開通し、こちらも全線復旧するなど、主要な交通インフラが復興した日でもあった。

## 4.東北スポーツボランティア・サミット宣言

5月2日、宮城スタジアムのあるグランディ・21の合宿所に全国各地から50人を超えるスポーツボランティアが集結し、スポーツでボランティアとして、今何ができるかについて話し合った。その結果まとめられたのが「東北スポーツボランティアサミット宣言」である。メーンスローガンは「スポーツで笑顔を未来へ」。スポーツに人

を元気に笑顔にする力があるのなら、そのためにできることをしよう、そう考えたのである。

さらに、メーンスローガンとともに、次の三つの活動目標を掲げた。

「未来を担う子供たちに、スポーツの楽しさを伝える活動を行います」

「スポーツを通じて震災復興のための支援活動を行います」

「地域に根差すスポーツ組織を支援する活動を行います」

### 5.89ERSの経営危機

東日本震災は、仙台のプロスポーツ界にも大きな被害を与えた。多くの施設はほとんどなんらかの被害を被り、再開には長い時間がかかるものもあれば、被害が少なかった施設はほぼ例外なく避難所などに使用されていた。

シーズンの終盤を迎えようとしていたバスケットボールへの影響は大きく、仙台・埼玉・東京の3チームは震災の日でシーズンを終了せざるを得なかった。そして、震災後ほどなくして地元紙に89ERSの経営危機のニュースが掲載された。

「そこにあることが当たり前」ではないということ。市民が経営危機の事実を知り、多くの仲間があちこちで募金や署名活動を自発的に開始し、その輪は全国に広がった。選手たちは、全国のチームに分散する形で所属し、残りのシーズンを戦った。その後たくさんの募金と23,000人を超える署名によって、チームはかろうじてbjリーグから存続を認められた。しかし、震災の年に被った経営的なダメージはあまりにも大きく、後の2018年の経営体制刷新の大きな遠因となった。

### 6.プロ野球オールスターの開催とボランティア

震災があった2011年のサッカーや野球のボランティア活動は、例年よりやや遅れてスタートした。また、この年と翌12年のボランティア参

加者数は大きく減少した。

こうした中、11年7月24日に開催されたのがプロ野球の「マツダオールスターゲーム2011」であった。このゲームには被災地から5,000人以上の子どもたちが招待され、1日を笑顔で過ごしていただくための企画であり、満員となった球場内の観客のサポートを楽天ボランティアが行った。同時に、全国からこの日のための集まってくれたボランティアスタッフが、招待された子どもたちと隣接する陸上競技場でのイベントをサポートした。

同年10月10日、仙台市などで開催されたオリンピックデー・フェスタやラグビートップリーグのチャリティマッチのサポートを行うなど、全国の仲間とやれる活動をやれる範囲で取り組んだ1年であった。

### 7.仙台のスポーツ関連イベントが大きく変化

翌年の2012年も前年の震災によるさまざまな影響を受けながら活動が続いた。同時にまた、仙台のスポーツが変化した年でもあった。

5月、それまでエリート対象の大会だった「仙台国際ハーフマラソン」が市民ランナーにも開放され、1万人規模で開催された。私たちも初めて参加したが、大会規模の拡大に運営体制が追い付かず、課題の多い苦い活動となった。しかし、この経験が翌年以降のボランティア活動のベースとなった。

8月にはU-18女子のワールドカップが宮城スタジアムで開催された。日本代表戦もあった。東京電力女子サッカー部マリーゼが東日本大震災による影響で休部したことを受け、その受け皿としてベガルタ仙台レディースが誕生し、そこから代表として参加した選手もいた。

10月、本来は2011年に予定されていた「ねんりんピック」が1年遅れで開催され、SV2004は研修段階から参加し、約1,300人の仲間と一緒にボランティア活動をさせていただき、全

国から参集した選手や役員にお礼の気持ちを伝えた。

11月、女子バレーボールの仙台ベルフィーユのゲーム運営のサポート活動を開始した。これまで、女子のスポーツの観戦機会がなかった地域にサッカーとバレーボールのチームができたことは、活動の幅が大きく広がったといえる。

12月、これも前年の開催が1年遅れ、結果としてお手伝いするようになったのが「日本スポーツマネジメント学会」だった。地域のボランティアが学会の開催を手伝い、その中でスポーツボランティアの分科会を担当するという、きわめて珍しいパターンとなり、いい刺激になった。

女子スポーツへのボランティア活動の広がり、そして大規模なイベントによる新しい市民参加の機会の拡大、現在があるのは2012年の人のつながりが大きいと感じている。

特に仙台国際ハーフマラソンに参加してくれたボランティア仲間を、どう次の活動につなげていくか、参加者アンケートを実施した。そして、それが「スポーツボランティア・マッチング」への本格的な取り組みへの契機となったのである。

## 8. 楽天イーグルス日本一で終えた2013年

こうした活動をしていると、全てが予定通り、期待した通りということはなかなかない。勝敗をはじめ、むしろ思い通りにならないことの方が多いもの。一方で、思い通りにならないからこそ、最高の結果が生まれた時は、本当にうれしいということも経験している。

SV2004では年1回、4月に年次総会を開催している。前年の活動を振り返り、新しい年とともに考え共有する場となっている。2013年の総会では、基調講演者に女子バレーボールの仙台ベルフィーユ監督・諸隈英人さんをお招きし、話しいただいた。苦しい中であっても前

向きな取り組みや目標や夢が必要であるという熱い話に、参加したメンバーは皆感動したものだ。しかし、それから4年後、経営難でVリーグ機構の判断によりチームは廃部に追い込まれたことは残念でならない(その後2018年に仙台ベルフィーユの関係者らが中心となり、リガール仙台が設立された)。

市民ランナーに開かれてから2回目となる仙台国際ハーフマラソンについては、13年からSV2004はスタートとフィニッシュをする競技場の周りでの活動を担当している。一般の市民とともに、エコ活動なども担当し、終了後にアンケートを実施。ボランティア活動の継続希望者には、ひと月後の6月に、各ボランティア組織との出会いの場であるスポーツボランティア・マッチングを案内している。この結果年々参加者や参加団体も増加しボランティア活動の入門の取り組みとして現在も続いている。

振り返れば、SV2004は、ここまで組織として仙台国際ハーフマラソン大会をサポートしており、市政だよりなどを通じて応募される一般市民のボランティアと共に、基本的にはスタート&ゴールの会場となる仙台市陸上競技場で、ドリンクやエコステーション、案内や記録などさまざまな活動をしてきた。大きな特色は、大会の前から準備メンバーが大会事務局と打合せを重ね、前年までの反省や課題を踏まえて、当日のボランティアの活動内容を検討したり、マニュアルに取りまとめたりしていること。また、事前の説明会や研修会に際しては、受付や会場の設営・案内などの協力も行っている。

大会当日はスムーズな運営に向けて、大会事務局と連携して活動し、活動後はアンケートなどを通じて意見を取りまとめ、次につなげている。

この年7月には、バスケットの仙台89ERSに関わるチアリーダーや学生、チームスタッフやボランティアが集り、ワークショップを開催した。グループで意見交換し、連携してできるこ

とを検討した。その結果、当時の89ERSのホームゲームでは、ボランティア活動が始まる前のミーティング時に、チアがチームの応援の踊りや、体をほぐす軽体操をボランティアに教え、いい距離感が生まれていた。

8月の宮城スタジアムでのサッカー日本代表戦は、全国からの仲間の応援もあり約450人で活動した。終了後は、被災地にも案内した。

そして、11月。プロ野球の楽天イーグルスが日本シリーズで優勝し、日本一となった。誕生して9年目、星野監督の「ありがとう」という言葉に胸を熱くした。その後のパレードのボランティア活動は、一生忘れられないほどの高揚感に包まれ、最高の結果を分かち合っ1年を終えることができた。

## 第5節 連携によって仲間とともにチャレンジ

### 1. スポーツボランティアの次世代育成活動

2014年の活動は4月26日に仙台で行われた羽生結弦選手のソチ五輪での金メダルを祝うパレードから始まった。ご承知のように羽生選手は2018年にも優勝し、仙台でパレードを行っており、その規模は2014年の倍になったように思われる。

また、5月の仙台国際ハーフマラソンでは、前年までのエコステーションでの活動から、タグの回収や案内、記録などに活動の範囲が拡大しました。さらに、ゴールしたランナーに対しハイタッチや声かけを行うことも積極的に実施するようになった。

9月からは、文部科学省の委託事業として「中高生スポーツボランティア育成講座<sup>※6</sup>」がスタートした。この年、期間は短かったものの22人が無事に1期生として修了式を迎えた。「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」を見据えての活動であったが、既存のボランティアの活性化にもつながり、2015年から

は「スポーツコミッション仙台」(会長:仙台市長)が主催し、現在も続いている。

どちらかといえば、これまでSV2004として活動することが多かったが、この時期を境に、他組織と連携して活動することが増加していった。いうまでもないことであるが、スポーツボランティアは「活動の場」があつてこそ楽しみながら活動できる。さまざまな組織や個人との連携は、活動の大切な生命線であり、苦労はあつても大切にしたいものである。

(脚注)

※6 中高生スポーツボランティア育成講座:「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」の開催地の一つとして宮城が決まったため、スポーツボランティアの体験を通じて、若い世代を育成する事業が2014年からスタートした。この取り組みは、オリンピック閉幕後の現在も継続している。開始当初は文部科学省の委託事業だった。次年度からは新たに発足した「スポーツコミッションせんだい」が主催し、SV2004が現場での運営を主管している。体験希望者は、説明会・研修を受講した後、用意された活動メニューの中から3回以上を選択し、活動後に都度レポートの提出を求めている。規定の活動が終われば、受け入れてくれたイベント主催者や、サポートしてボランティアの方々と修了式を開催して修了書を授与している。こうした取り組みは、受け入れている各プロスポーツやイベントの主催者の理解のもとに実施されており、継続することで生まれた学校関係者の支援があり続いている。コロナ禍によって1年遅れで開催された宮城のオリンピック会場に、多くの講座修了者の姿があった。地道な取り組みながら、確実に未来につながっているものとなっている。



アイスブレイク



グループワーク



楽天イーグルスでの体験



カメイアリーナ施設見学での体験

## 2.課題を見つけ、改善して次につなげる

2015年は5月の仙台国際ハーフマラソンでの活動からスタート。前年までの活動の反省から、「案内係」の活動を設け、初めてのランナーへのサービスを一層徹底するようにした。終了後にはいつものボランティアマッチングのイベントのほか、活動報告会を開催し、いろいろとご意見もいただいた。

8月には、復興支援を一つの目的として大相撲仙台場所が開催され、事前の準備からお手伝いした。約7千人の観客でいっぱいになった仙台市体育館を見たのは初めてであった。そのわずか2週間後には、女子ワールドカップバレーボール大会が同体育館であり、3日間ともに6,000人を超える観客が来場した。延べ210人のボランティアと狭い空間に大勢の観客、複雑な運営の組織体制、いろいろな課題も見つけ、活動報告書にまとめている。

12月には、地下鉄東西線が開通し、1月にはbjリーグ最後となるオールスターゲーム(宮城では2回目)がゼビオアリーナで開催された。こ

れに合わせて、全国のボランティア仲間にも呼びかけ、各地の活動事例発表会のほか、前日準備・懇親会、当日の運営まで一緒に活動した。

活動を「点」で終わらせずに、課題を見つけ、改善して次につなげること、常にそれを意識して活動した1年であった。

## 3.さまざまな連携をベースに活動を展開

「ラグビーワールドカップ2019」「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」を控え、2016年という1年はまさに助走の1年となった。

この年の仙台国際ハーフマラソン大会は先着の受付がわずか23分で定員となり、人気の定着ぶりがうかがえた。前年よりも案内を強化し、「全員が案内係」というスローガンも作って活動した。終わって感じるのは、もっともったい大会にできるはず、ということであり、改善に終わりはないことを実感した。

初めての活動としては、卓球日本代表女子のリオ五輪を控えての合宿への対応だった。仙台出身の福原愛選手と、同僚の伊藤美誠選手はその後大会で銅メダルを獲得している。また、同年7月には、研修会として仙台でのオリンピック・パラリンピックに向けての取り組みを学び、その後ブラインドサッカーの選手を招き、視覚障害などについて体験も交えて教えていただいた。

9月には、宮城県ラグビーフットボール協会、釜石市総務企画部ラグビーワールドカップ推進室と連携し、ユアテックスタジアムで開催されたトップリーグの試合で、ラグビーカフェを実施した。これはラグビー関連のさまざまな展示や寄せ書きのイベントなどを行うもので、コーヒーを配布しながらのアンケート調査なども行った。こうして、釜石との連携がスタートした。

10月には、仙台を拠点に活動するフットサルのヴォスクオーレ仙台と初めて連携し、リーグ創設10年で初開催となったオールスターゲームのボランティア活動を行った。これを契機に、

次のシーズンから、正式にチームにボランティア組織を立ち上げることとなった。

#### 4. 多様なつながりが生む新たな活動

2017年の活動は、4月に行われた「フィギアスケートモニュメント」(仙台市地下鉄東西線国際センター駅前)のオープニングセレモニーのサポートから始まった。モニュメントは、仙台が日本のフィギアスケート発祥の地ということと、金メダリストの荒川選手と羽生選手の出身地ということを記念して設置されたものであった。

6月からは正式にフットサルのボランティア組織の立ち上げに関わった。

SV2004の活動は、小さな組織、少ない観客やスポンサーで苦勞するスポーツの運営サポートのボランティアも大切であるが、同時にだからこそ、地域にチームの存在を知らせ、共に応援する環境づくりも大切な支援のあり方だと考えている。

スポーツボランティアの活動を市民組織として継続していると、スポーツイベントの主催者から運営に関わる警備・売店・行政・メディアなど、実に多様な人や組織とのつながりが生まれる。そうした関係は基本的には個人的なつながりであるものの、せっかくのつながりをもっと横展開したいと思い、スポーツをキーワードとした異業種交流会を始めたのはその年の12月のことだった。名称は「せんだいスポーツサポーターズ・ネットワーク」(略称SSSN)としている。

参加者の自己紹介に始まり、それぞれの情報提供や、時としてはテーマを募り、そのテーマにふさわしい方に話題提供していただいたり、参加者でグループワークをしたりした。その後、年に2度ほどは交流会も続け、そこでの出会いから実に多くのつながりが生まれ、お互いにサポートしあう、そんな光景がたくさん生まれた。

参加者もプロスポーツからスポーツ施設関係者、学校や企業、福祉やまちづくりの団体、そ

して個人にも広がり、時代に合わせて変化していると感じている。今後はSNSなどを積極的に活用することで情報の共有化を強化したり、オンラインを活用したりすることで新しい広がりも作っていく予定である。

スポーツに限らず人や組織がつながる場は意識的に作らなければ生まれない。そうした仕組みづくりの呼びかけに際し、利害関係を持たないボランティア組織が行うことで、意外にスムーズにいくケースも多いように思われる。

SSSNは、当初は20人ほどでスタートしたが、人が人を呼ぶことで一時は200人を超える規模となった。発足当時は原則参加費無料でスタートしていたが、2024年からは会場費などの関係で年会費制に移行し、現在は140人ほどとなっている。

時代の変化を反映し、ここ数年はまちづくり団体やマイナースポーツ、パラスポーツや福祉団体などの参加が増えている。

月1回の定例会は、旬の話題提供や情報提供を通じて、多様な人のつながりが生まれ、さまざまなイベントの誕生にもつながっている。また、学生の参加も少しずつ増えており、SSSNの出会いが就職につながる事例も生まれてきている。

#### 5. さらなる横展開を目指して

2018年に入り、SSSNから新しいスポーツ文化も生まれてきた。その一つが「東北チアフェスティバル2018」で、私たちと同じように、スポーツのイベントやチームを支えるチアリーダーが、東北中から集まり開催された大会であり、私たちも応援に参加した。

同年には「仙台スポーツ映画祭」もスタート。スポーツを通じて若い方々がいろいろな挑戦をする地域になってきたことが、ごく自然にうれしく思う。ただ、いずれも経費の問題がハードルとなり、現在は残念ながら休止している。

SV2004では、活動の中で生まれたつながり

を生かし、仙台大学とボランティアインフォと共に、仙台スポーツボランティアプロジェクトを起ち上げ、日本スポーツボランティアネットワーク(JSVN)と連携して、スポーツボランティア研修を18年、19年と2年連続開催した。それまでは「研修は無料が当然」という風土があり、実施するまで心配もあったが、18年の研修だけ見ても、参加費を払って受講した人が180人近くに上り、スポーツボランティアへの関心が高まってきていることを実感した。

ボランティアの活動に終わりはない。いろいろなことに取り組めるのも、これまでのつながりや、経験があるからだと感じている。さらなる横展開を目指し、どう次の世代に引き継いでいくか、今はそれが一番大きなテーマであると考え活動している。



スポーツボランティア研修の様子

## 6. 情報発信、研修、育成のための取り組み

2019年は久しぶりの大きなスポーツ国際大会となるラグビーワールドカップが日本で開催された。残念ながら仙台は開催地にはなれなかったものの、東北からは釜石が開催地の一つとなった。

この大会を通して得られたボランティアの募

集からオリエンテーション、事前の各種研修やさまざまな運営のノウハウは、延期開催となった東京オリンピック・パラリンピックをはじめとする大きなスポーツイベントに対応する際の流れや体制のあり方に大きな影響を与えた。何よりSNSなどを通じて地域や世代を超えた人のつながりをつくり出したことは大きなレガシーといえる。

大会会場の一つ愛知県豊田市には、「スポーツボランティアとよた」というボランティア組織が誕生した。現在では約3,000人を超える登録者数となっている。

レガシーは「人と経験」だとすれば、一過性のイベントではなかなか難しいテーマであるが、こうしたテーマを意識し準備することが何より大切だと思われる。

仙台でも東京オリンピック・パラリンピックを前に、宮城で活動するボランティアの受け皿となることを想定し、「せんだいスポーツボランティア・ステーション<sup>※7</sup>」が、スポーツコミッションせんだいの中に設置された。結果として、在仙のスポーツボランティアをつなぎ、情報発信や研修、育成のための取り組みが容易となり、大きな節目となった。

(脚注)

※7 せんだいスポーツボランティア・ステーション:公式ホームページには「スポーツボランティアの募集・登録や、スポーツイベントのボランティア情報の発信、スキルアップのための研修会や各種講演会の開催により、既存スポーツボランティア団体や、今後活動を希望する人への支援を通じ、多くの方が積極的にスポーツボランティア活動に関われるよう支援していくものです」と掲載されている。仙台国際ハーフマラソン大会など、さまざまなスポーツイベントでのボランティア募集から、中高生スポーツボランティア育成講座やスポーツボランティアマッチングなどの窓口として、育成や活動者の拡大に取り組んでいる。事務局は「スポーツコミッションせんだい」の中にあり、スポーツイベントの招致を役割とするコミッションと連携。スポーツ庁が地域スポーツの活性化窓口としてコミッションを位置付けていることもあり、札幌市や静岡県などでもコミッションがボランティア組織を運営している。

**せんだいスポーツ ボランティアステーション**  


ロゴタイプとロゴマーク

## 第6節 コロナ禍を経て

### 1.見えない相手と戦う

本来なら、オリンピック・パラリンピックの開催によって、熱気に包まれるはずの2020年は、世界規模の新型コロナウイルス感染症拡大により、社会の様相が一変した。

宮城県では、東京オリンピック・パラリンピックに向けて数年をかけて「フィールドキャスト・シティキャスト」という公式のボランティア活動が計画されていた。加えて、仙台市が独自に取り組むイタリアチームのキャンプ地誘致と連携した「アーモイタリア」というおもてなしや交流の活動や、中高生を中心として大会の盛り上げに向けて準備してきた「せんだい・みやぎ2020」の活動まで、さまざまなボランティア活動が計画されていた。

しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で大会が1年延期となり、同時に、この年計画されていた多くのイベントも延期や中止となった。

SV2004がこの時期に大切にしたのは、どう仲間の不安を軽減し、次につなげていくかであった。会員に対してメールで4月に実施したアンケート結果を見ると、「モチベーション・コミュニケーション・体力」の低下が懸念された。そのため、ホームページに会員からの情報を集め、前向きな情報発信を増やしたり、通常週1回のメール配信を週2～3回にしたりなど、できる限り双方向となるよう取り組んだ。6月から7月は、ボランティア向けの「新型コロナの予防研修会」や「軽運動とオンラインの研修会」なども実施した。

また、この時期に始めた歴史を学びながらのウォーキングは、すっかり人気定着し現在も続いている。

全国のボランティア仲間も、仙台・宮城同様、活動の場がなくなり、モチベーションの低下が見られたため、有志で5月にスタートした

のが「スポボラサプリー<sup>※8</sup>」というオンラインによるネットワークだ。これは「スポーツボランティアを元気にしよう」という目的で急速に普及し注目されていたオンラインツールを使用したものである。普段聞くことのできない方々のトークを聞いたり、交流や情報交換をしたりしようというもので、ほぼ月1回のペースで開催し、現在も継続している。

登録者もスタート時は20人～30人だったが、やがてボランティアだけではなく、イベント主催者、学校関係者、行政やパラスポーツ関係者まで広がり、現在では200人を超えるネットワークとなっている。

この年は変わるものと変えてはいけないものを判断しながら、安心安全を第一に、見えない相手と戦いながら、活動再開の道を探った1年となった。コロナ禍により、当たり前がそうではなくなることもあり得る、改めてそう考えさせられた1年であった。

(脚注)

※8 スポボラサプリー:「活動への不安を減らし、元気と笑顔を創るサブリメントのような企画を全国の仲間と、オンラインでつながり実行する市民有志の組織です」を目的に、2020年5月発足。「活動への不安を減らそう／活動への元気と笑顔を創ろう／つながること、楽しみを増やそう」をスローガンにした。「テーマ」を決めての情報交換や、スポーツ関係者による講演企画、各地の仲間との交流企画などを定期的で開催してきた。2022年からは、リアルでの交流会も開催し、オンラインを通じてつながりが生まれた仲間が、実際に会うことで新しい交流・連携の段階に入っている。

### 2.コロナ禍を乗り越える

新型コロナウイルス感染症の影響は予想以上に長引いたが、2021年に入り、少し落ち着いた時期からスポーツイベントは無観客から上限を設定しての有観客となり、ボランティア活動もゼロから人数や年齢制限を設けての活動から、通常に近い活動まで戻っていった。

しかし、休止期間によるモチベーションの低下や、感染への不安もあり、参加するボランティアは全国的に減少し、中には活動自体を停止した組織もあった。

活動参加時にはマスクやビニール手袋の着用、消毒液での手洗いや参加時の検温を含む健康チェックなどもあり、ボランティア活動も来場者に対する検温や消毒のほか、巡回消毒や座席などの清掃消毒なども加わった。何よりも会話や接触が禁止されるなど、本来コミュニケーションが好きなボランティアにとっては、つらい期間が続いた。

1年延期となった東京2020オリンピック・パラリンピックも、多くは無観客での開催となり、ボランティアにも大きく影響した。幸い宮城は有観客での開催だったが、それでもシティキャストで見ても当初登録の約3分の1程度の活動にとどまった。

一方で前年ボランティアの活動場所が大きく減少したことへの対応策として準備してきた新しい活動の場づくりが実を結んだ。女子サッカーWEリーグの「マイナビ仙台レディース」、女子バレーボールの「リガール仙台」にボランティアの仕組みが導入された。また、施設型のボランティアとしてカメイアリーナ仙台とアイスリンク仙台泉を核とする「FUN-TE」ボランティアが誕生し、これまでの年間継続のボランティア組織が6つから10に増加した。

### 3. テーマは「スポーツ+花と緑」

コロナ禍によって、スポーツやボランティア活動や活動のための価値観にも変化が生じた。それまでの「コミュニケーション」主体の活動の楽しさが制約され、新たな活動の楽しみづくりが必要となったのだ。

そのヒントは実は身近なところにあった。2020年にスタートした歴史を学びながらのウォーキングがそれだ。これは健康づくりとコミュニケーションの場づくりが目的だったが、仲間の中に仙台市歴史博物館のボランティアや、歴史好きのメンバーがいて、単に歩くだけでなく、住んでいても知らない仙台などの知識を学べるということで次第に参加者が増えてい

たのだ。

ボランティアは当然それぞれ経歴も趣味や持っている資格も異なるが、そのスキルを普段のスポーツボランティアの活動に生かすことができれば、何より自分の好きなことが活動につながれば、それは新たなやりがいにつながる。そのことが、ウォーキングの成功から学んだことであった。

さらに「スポーツ+花と緑」というテーマについてであるが、これは実は以前から検討していたものだった。ベガルタ仙台や仙台89ERSの試合の際に、長い間ボランティア仲間がトイレなどに花を飾っていた。同時に仲間との会話の中で華道の師範が複数いることも分かっていた。また、2023年には「全国都市緑化フェア」が仙台を会場として開催されることも決まっており、そこにつながるのではないかという思いもあった。

実際の活動は「応援花」と名付け、誕生したばかりの「マイナビ仙台レディース」の会場で実現した。来場された親子と一緒に花を活け、応援花のコーナーをつくるというシンプルなのだが、女子サッカーらしい華やかさにもつながったと思う。コロナの影響で声出しの応援ができないことを受けて、せめて、花で応援というもので。現在まで続いている。

次に「スポーツと福祉」というテーマでは、道路や公園などの公共空間を活用した「ボッチャ体験」の取り組みを東北大学大学院や行政と連携して実施し、結果、仙台市長杯というボッチャ大会の発足や、宮城県ボッチャ協会の誕生にもつながっている。また、感覚過敏の子どもとその家族のためのセンサリールームの活動が始まり、観たくても観戦機会の少なかった方々にスポーツを楽しんでいただく活動を始めている。

「スポーツとアニメ」というテーマでは、ゴールが最初からはっきり見えていたわけではなかったが、カメイアリーナ(仙台市体育館)がアニメ

「ハイキュー」の聖地だったこととつながり、施設案内のボランティアとして2021年7月に活動を開始した。その後映画のヒットもあり見学者が大幅に増加し、ハイキューの登場人物が仙台市の観光特使に任命され、モニュメントが市内各地に設置されるなどし、2025年5月のアリーナの改修工事前の公開イベントには2日間で9,000人が来場している。

#### 4.新しい日常の中で

2023年に入ると新型コロナウイルス感染症の影響が減り、スポーツのイベントが通常の姿で開催され、4月から6月には全国都市緑化フェアが予定どおり開催された。案内や植栽のメンテナンスにはボランティアも活躍し、スポーツボランティアの仲間も多く参加するとともに、スポーツチームと関連したイベントも会場たびたび開催された。

7月にはユアテックスタジアムでなでしこジャパンのワールドカップ壮行試合があり、大学生による応援企画もあり1万人の観客が応援。ボランティアも県外からの参加もあった。日常が戻ったことでアニメーションの聖地としてのカメラアリーナの見学者も増加、8月19日には仙台市の観光特使として、ハイキューモニュメントが設置された。

#### 5.イベントの多様化

2024年、バドミントンのSJリーグから始まった1年だったが、フットサルのヴォスクオーレ仙台の久々の1部リーグ昇格や、中断していた大相撲仙台巡業の再開、7月にはユアテックスタジアムでのラグビー日本代表戦など、スポーツの単発のイベントが増加しボランティアの活動機会が増えた年となった。

また、パラスポーツの大会もポッチャを中心に広がり、大学やボランティアにもチームが生まれ、仙台市長杯も始まった。10月には2026年からスタートするプロバスケットのBプレミア

リーグに仙台89ERSの参画も決定し話題となった。

#### 6.まとめ

仙台・宮城のスポーツは長く市民・県民が応援し、ボランティアとしても支援してきた。常に課題はあったが、むしろ、ボランティアと主催者が密接に連携し前向きに取り組んだことで、仙台方式のごみの分別などは全てのスポーツ共通のものとして定着している。

若い世代の育成のための中高生のスポーツボランティア育成講座や、スポーツボランティアマッチングという仕組みも生まれた。その意味では、スポーツに関わる人が互いに「支え合う」関係が大きな特色である。また、スポーツボランティアの活動が、プロスポーツやいろいろなスポーツイベントを横でつなぐ役割を果たしている点も特筆すべきことである。常にそうした関係があるからこそ、コロナ禍の際にはいち早く感染予防の研修を開催し、スムーズな活動開始につなげることができたといえる。

ボランティアはやらされるものではない。どうしたら「やりたい」ものにできるか、「楽しい」ものにできるかを考えて改善を積み重ねてきたことで、プロスポーツの官民一体の支援組織にもボランティア組織が参加するという信頼関係ができていられると考えられる。

市民がスポーツを支える流れに関するサマリー  
仙台にスポーツボランティアが誕生した時代背景と理由

- ①1993年誕生のJリーグのホームタウンの取り組み→地域密着の中でのボランティア制度の普及
- ②インターネットの普及による情報発信の変化  
→情報の迅速な共有
- ③1998年のNPO法による市民活動の活発化  
→市民組織の活動を支援する仕組み
- ④1995年1月の阪神淡路大震災によるボランティアへの関心の高まり
- ⑤2000年9月に策定されたスポーツ振興基本計画→地域スポーツの振興、する・みる・支える
- ⑥市民がボランティアという形で災害や福祉、環境問題や地域スポーツの振興に関わる背景には、さまざまな社会の変化があった。

仙台のスポーツボランティアが関わった主なイベント

- ・1998年 ブランメル仙台(現ベガルタ仙台)ボランティア活動開始
- ・1999年 ベガルタ仙台市民後援会発足
- ・2001年 みやぎ国体、宮城障害者体育大会開催  
～全県で約3万人のボランティア参加
- ・2002年 サッカーワールドカップ宮城大会
- ・2003年 グランディ・21ボランティア発足
- ・2004年 市民スポーツボランティア SV2004発足
- ・2005年 楽天イーグルスボランティア活動開始(プロ野球初)
- ・2005年 プロバスケット仙台89ERSボランティア活動開始
- ・2012年 ねんりんピック開催
- ・2012年 仙台国際ハーフマラソン一般ランナー参加  
(一般ボランティア募集)
- ・2014年 スポーツコミッションせんだい発足  
(構成メンバーにボランティアも参加)
- ・2019年 せんだいスポーツボランティアステーション発足
- ・2021年 東京2020オリンピック・パラリンピックの宮城大会開催
- ・2021年 マイナビ仙台レディースボランティア発足
- ・2021年 カメイアリーナ仙台ボランティア発足
- ・2021年 リガーレ仙台ボランティア発足

1.プロスポーツ・準プロスポーツの活動

年	チーム名	種目	登録数	延べ活動人数	平均活動者数
2016	ベガルタ仙台	サッカー Jリーグ	188	1,886	94.3
2017			175	1,695	77.0
2018			171	1,569	74.7
2019			165	1,949	72.0
2020			159	534	31.4
2021			145	824	37.5
2022			123	926	45.0
2023			132	1,036	49.3
2024			131	866	45.5
2016	楽天イーグルス	プロ野球	231	3,117	47.0
2017			238	3,287	50.0
2018			268	3,914	51.2
2019			263	3,482	52.0
2020			245	1,195	35.0
2021			194	2,324	32.0
2022			212	2,863	30.0
2023			200	2,279	31.0
2024			182	2,787	42.0
2016	仙台89ERS	バスケットボール Bリーグ	161	1,237	44.2
2017			157	1,262	42.6
2018			138	1,073	36.0
2019			142	1,380	46.0
2020			152	839	40.0
2021			103	582	19.2
2022			81	406	16.2
2023			117	854	28.5
2024			110	594	28.3
2021	マイナビ仙台レディース	サッカー WEリーグ	64	175	35.0
2022			60	288	36.0
2023			65	377	31.4
2024			73	293	24.4
2021	リガーレ仙台	バレーボール	47	56	28.0
2022			66	62	31.0
2023			92	111	27.8
2024			119	153	25.5
2022	ヴォスクオーレ仙台	フットサル	106	172	28.7
2023			112	192	30.0
2024			115	306	30.6

2016
2017
2018
2019
2020
2021
2022
2023
2024

580	
570	
577	
570	
556	
442	553
419	651
449	718
423	730

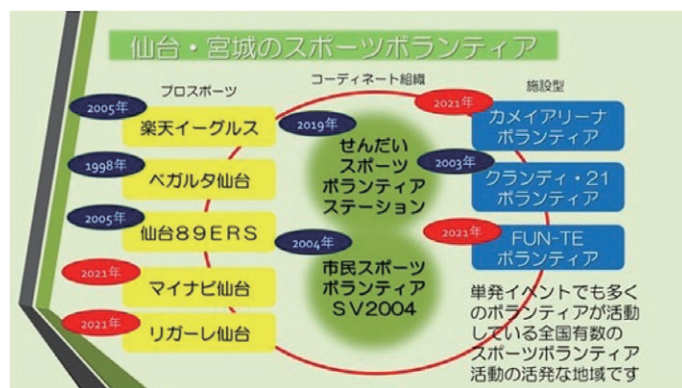
## 2.単発のスポーツの活動

イベント名	種目	登録者数	延べ活動人数	平均活動者数	主な活動内容
仙台国際ハーフマラソン大会2024	ランニング	305	291	291.0	ドリンク配布・会場案内・エコステーション 等
大相撲仙台場所2024(4日間)	大相撲	277	258	64.5	会場設営・会場案内・エコステーション 等
ツールド・東北 2024	自転車	133	133	133.0	エイドステーションでのライダー支援活動
仙台泉ヶ岳トレイルラン2024	ランニング	43	22	22.0	衛生管理・入場管理・更衣室管理 等
TOUCH THE SPORTS!2024 ～からだを動かす楽しさをしよう!!～	イベント	28	28	10.5	受付・消毒・パンフレット配布 等
	2024年	786			
	2023年	738			

### 【参考】在仙ボランティア団体登録者数

団体名	登録者数	2023年
市民スポーツボランティア SV2004	142	152
せんだいスポーツボランティアステーション	1,525	1,123
FUN-TE!ボランティア	48	48
グランディ21ボランティア	88	
カメイアリーナ仙台ボランティア	167	102
	1,970	1,425

### 仙台・宮城のスポーツボランティア組織



## 第4章 スポーツ振興と人づくり

アイデアを形にする力——「発想」「段取り」「人脈づくり」

【特別インタビュー／語り手：武田 均 氏】

仙台市スポーツ協会会長／仙台市サッカー協会会長／スポーツコミッションせんだい副会長

「仙台国際ハーフマラソン大会」や世界中の話題を集めた仙台出身のフィギュアスケーター・羽生結弦選手の凱旋パレード、東北楽天ゴールデンイーグルスの日本一優勝パレードなど、仙台市が担当したスポーツ関連イベントの要にはいつも武田均氏の顔があった。ここでは武田氏が携わった主なイベントに焦点を当て、それらの発想や段取り、人脈づくりのヒントとなる数々のエピソードを語っていただいた。

### 1. 思い出深い祝賀パレード

#### ① 発端

2006年開催のトリノ冬季オリンピックのフィギュアスケート競技で、荒川静香さんがメダルを取るかもしれない、と東北高校の五十嵐一彌校長（東北高等学校第十一代校長、現校長の父）から私に電話が入りました。この日、彼女の母校である東北高校の階段教室に設けられたパブリックビューイングに誘われた私は、生徒たちと一緒に演技を観戦し、金メダル獲得の瞬間をともに喜びました。

ものすごく雪の降った日で、金メダルが決まった時は、生徒たちも教員も大歓声でした。その時の光景がスポーツ紙などで報じられましたが、降りしきる雪の中を車で帰る途中、この情景を何度も思い出し、「これは祝賀パレードをするしかない」と確信しました。確かに私の発案といえますね。実は、トリノオリンピックでは、日本人選手の中で荒川選手一人だけが金メダルを取っていたわけで、彼女の気持ちというよりは、もう仙台市民全員で祝うためにも仙台市中心部で大々的にパレードをすべきだと決めました。そこから、この発想を形にするための奮闘が始まりました。

#### ② パレード開催の基準

よく聞かれるのが「パレード」をするための基準があるのかということです。実際には、2006年当時の仙台市には明確な基準はありませんでした。

荒川静香さんは、神奈川県鎌倉市生まれですが、利府町に約10年間住んでいた縁から、利府町の観光大使に就任しています。利府出身でしたが仙台市青葉区に住んでいて東北高校に通っていたわけです。

金メダル獲得の次の朝、登庁してすぐ課内の職員に荒川選手の祝勝パレードをやらうと言いました。パレードの検討をしようとしていること自体まだオープンではないけれど、本人や家族はどう思うのだろうかという意見も出て、じゃあ聞いてみようということになりました。私がたまたま荒川選手の母親の電話番号を知っておりまして、トリノに応援に行っていた家族が帰国すると思われる3日後に直接連絡して会うことにしました。「今回の快挙をぜひ仙台市民としてお祝いしたいので、祝勝パレードを考えているんですが、ご家族としてはいかがでしょうか?」。ご家族は「こんなにありがたいことはありません。でも私たちからお願いしますなんて絶対言える話じゃないのですが、うれしいです」とおっしゃるので、「進めていいですか」、「はい」、と回答いただきました。そこから初めて市役所の文化スポーツ部内で話し、内諾が得られたので局（当時は市民局）に上申していったわけです。

次なる問題は「ではどうやって、やるか、やれるのか…」でした。私たちの部署では「仙台国際ハーフマラソン」の経験がありましたから、何が大切でどこを説得すれば可能かというノウハウ

ウが蓄積されていました。そこでまず警察に打診することになりました。公道で車両や人流を規制してのパレードですから、宮城県警交通規制課の説得に当たることにしました。すぐ伺って相談しました。すると思いのほか感触がよくて、仙台市がメインでやるのであれば、責任は仙台市にあるということで、ダメとは言われませんでした。そこでいよいよ実現に向けて本格的に取り組み始めたのです。

パレードの日時を確定するため、荒川さんご本人に都合を確認し、3月27日(月)に開催すると決めました。

トリノで日本が取った唯一の金メダルが荒川静香選手だということで盛り上がる中、仙台市とすればゆかりのある彼女のことも考えなくてはならない、絶対やらなければならない、という強い思いがあったのは今でもよく覚えています。

もちろん当時も市民栄誉賞はありましたが、それとは別に、パレードを開催することで市民の皆さんで彼女の金メダルを祝おうということです。普通、オリンピックもそうですが、有名な方が仙台に来ると必ず市長表敬訪問とかしますよね。荒川さんは、世界選手権の時も来てくれて、何回も仙台市を表敬訪問しています。でも、世間的にはニュースとして出ていないんです。市長を表敬訪問して「よかったですね」「おめでとう」というのはありますが、会う人たちも結構クローズドなところがあります。そうではなくて、絶対に市民の皆さんにお披露目すべき金メダルだと確信しました。地元仙台の英雄、ヒロインですかね。まさに誇りであり、シティプライドを具現化してくれました。それを意識して、仙台市民でよかった、喜びを共有できてよかったと誰もが思えるようなひとときにしたいと思いました。

そしていよいよ2006年3月27日(月)、仙台市中心部の東二番丁通の車両通行を規制しての凱旋パレードが実施され、沿道には公称で約7万3,000人の観衆が集まりました。実際はもっ

と多かったのでは、とも言われているようです。

### ③生かされた仙台ハーフマラソンのノウハウ

実施と日時決定の段階でファンは日本国内にとどまらず、海外からも大勢来るだろうと想定できていました。また、人と車を止めるというのはハーフマラソンのノウハウが生かせると考えていたので、あまり不安はありませんでした。どこの交差点を止めるか、その手前から止めて人を流す、車を流すというマラソン運営時の道路規制に関するノウハウが、スポーツ振興事業団にも市役所にもありました。

話は少しそれますが、仙台市は毎週土曜・日曜ともなると東北6県から高速バスがたくさん押し寄せ、大きな経済波及効果を生み出しています。もし日曜日にフルマラソンで市内を2周するのでスタートから撤収まで8時間車両通行止めにしたと言ったら、仙台駅周辺や一番町などの商店街はいい顔をしません。ハーフマラソンにして、10時から12時までの間、車を止めますが我慢してくださいとか、高速道から下りて仙台西道路のトンネルをくぐってくる高速バスの利用客には迷惑がかからないコースにします、そういった配慮をした上で、「ぜひハーフマラソン大会をやらせてほしい」とお願いしたのです。仙台ハーフマラソンがこんなにも長く続けてこられたのも、こうした配慮の上に成り立っているといえます。

フルマラソンではなく、なぜハーフマラソンかというと、現代風に言えばシティセールスとしてのマラソンと元々の都市機能を制限したりしないようバランスを取る上で、ハーフマラソンというスタイルが合っていたといえるでしょう。また参加者にとっても街の中心部を走れるのがこのマラソンのいいところで、けやき並木と二番丁通の広々とした道路と、新しくなった仙台駅東側の道路を走れる、こんないいコースは他にはないと思います。

#### ④シビックプライド

パレードの開催について総括する話の中では、ハーフマラソンのノウハウが活かされているというのは、これまでどこにも出ていない話です。都市機能と多様なイベントを融合し、上手に着地させていることが重要なポイントです。SENDAI光のページェントや定禅寺ストリートジャズフェスティバルが仙台市の重要なコンテンツとなり、シティセールスとして活用され、今ではシビックプライドとなっています。

もちろん、イベントもパレードもただやればよいというものではありません。基本的にはこの街に暮らしている方や商売をされている方の中には「やらなくていい」という方もいるわけで。でも実施することによって、その結果、人出が増えたり、効果として直接売上のアップにつながったりするわけです。震災後、初めて日本一になった東北楽天ゴールデンイーグルスの優勝パレード<sup>\*1</sup>のときは、パレードを一目見ようとなん十万人も集まりました。とはいえ初めからそうなるかどうかなんて誰も分からないので、その辺の見極めが難しいところだともいえます。

今やこうしたシビックプライドは、街の活性化の起爆剤とも言われ、プロスポーツを通じての「地域活性化」や「地方創生」に効果的であると、多くの自治体が注目し、さまざまな取り組みがなされているところです。

(脚注)

※1 東北楽天ゴールデンイーグルスの優勝パレード:2013年11月24日(日)に仙台商工会議所から五橋交差点まで全長約1.5kmの間で行われた。このパレードは、当日午前10時50分の出発式に始まり、11時にパレードが開始され、11時41分に終了した。球団社長とともに1・2軍の監督・コーチ・選手全員と、楽天イーグルス・マイチーム協議会会長(仙台商工会議所会頭)、同副会長、同顧問、宮城県知事、仙台市長、仙台経済同友会代表幹事らが、それぞれオープンカーとオープンバスに乗車。プラスバンド(宮城県警音楽隊・消防音楽隊)、東北ゴールデンエンジェルス、仙台フィルハーモニー管弦楽団などが参加し盛大に開催された。パレード当日沿道に集まった観衆は214,000人(主催者発表)で、天候は晴れで、気温12.9℃、風向きは西の風3.5m、湿度56%と、絶好のパレード日和だった。

## 2.組織づくりと継承されるバトン

### ①民間協働の運営体制づくり

体制づくりでいうと、どれをとっても仙台市単独で実施することはできません。まず宮城県に相談し、次に商工会議所に相談します。荒川さんの時は、突然の発案だったということもあり、実施するに当たって、最初の課題は「予算をどうするか」という相談でした。予算の見通しが不明な中で、一番かかる経費が警備費です。道路の奥の奥まで脇道も含めた規制・警備を実施しなければなりません。当時、私が関わっていたハーフマラソンのスポンサーが東洋ワークさんだったので、東洋ワークさんに相談しました。パレードの構想を話し、正直に警備費がほとんど確保できないことを話し、協力を要請しました。すると、東洋ワークさんから会社のスタッフジャンパーを着て運営に加わることを条件に、当日の道路規制や警備をお引き受けいただけることが決まりました。実際は何千万円もかかるのですが、安く上げることができて、荒川さんのパレードは大成功でした。民間の協賛協力をいただく方式は、その後、「仙台方式」と呼ばれ、スポーツの協会や団体の中で広く知られるようになりました。

スポーツ関連イベントの役割でいうと開催告知や機運の醸成も大事です。そのためメディアにもかなり早目に相談していました。新聞で告知するだけでなく、具体的には地元新聞社の河北新報社さんに一歩踏み込んだところで協力してもらうようになりました。ほかにも各メディアやテレビ局にもかなり突っ込んだ部分で協賛いただくようになりました。

そのノウハウが最終形となって発揮されたのが、東北楽天ゴールデンイーグルス優勝までの支援プロセスと凱旋パレードの実施です。

### ②知恵を絞って収益確保

羽生結弦選手のパレードの資金集めのためにTシャツ販売をしました。楽天イーグルスのパ

レードは、荒川静香さんや羽生結弦選手のように1人のパレードと違って、球団のパレードですから、見込まれる経費総額が膨らみます。ピンバッチや観戦券付きの個人協賛を募りましたし、民間企業からの協賛金をいただき後押ししてもらいました。パレードに来る人たちのためにも力を出そうと皆で汗をかきました。

資金がないからといって、諦めてしまったら絶対後悔する、そういう思いでしたし、あの決断は間違っていないでした。

Tシャツやピンバッチなど、グッズを作って皆さんに資金集めに協力してもらおうということで、自ら売りに回るわけです。「パレードを実現させたいのでご協力をお願いします」と言って回りました。市役所の中でも、稲葉信義副市長が率先して皆で買おうと号令をかけてくださり多くの市職員に買ってもらいました。

羽生さんの2回目のパレードの際は、価格2,500円のTシャツを8万枚作って販売しました。イベント会社の社長から、「1、2時間のイベント1回で、8万枚のTシャツを売るなんて初めて聞いた。やめたほうがいい」と忠告されましたし、別のイベント会社も同じ反応でした。しかし、フタを開けてみたら市役所内の協力も大いにありましたが、海外37カ国の人たちから注文が舞い込み、発送業務に追われました。8万枚売るというプレッシャーがありましたから、百貨店の藤崎さん、三越さんにもお願いして販売してもらいました。その結果、売り切れることができたわけですが、やはり直前まで売れるかどうか、不安でしたし、怖かったですね。

### ③受け継がれるバトン

Tシャツが思った以上に売れ、3千数百万円もの余剰金が残りました。それを宮城県スケート連盟に寄付し、この資金を元に県スケート連盟では、リンクの氷を直し、事務局の車両を新調することができました。つまりこの余剰金がアスリート育成のための資金となり、千葉百音選

手の遠征資金の一部や育成費として活用されたのです。

羽生さんのパレードの収益が次世代の選手の養成につながり循環しているわけです。千葉選手もそのことを知っているからこそ、次のオリンピックでのメダルを目標にしているわけです。

荒川選手のパレードカーの隣に乗った子どもたちも、しっかりと自覚していました。世界選手権出場の本郷理華選手もそうです。今こうしてフィギュアの選手が続々と育っているのは、荒川さんや羽生さんのパレードに来て、そこに本郷理華選手もいて、今の千葉百音選手がいてと、仙台のフィギュアの歴史がずっとつながってきたということです。

私が今一番注目している小学校5年生の菊池英仁くん(現在小学校5年生=11歳)は、すごく才能のある男の子です。全日本の合宿にも参加しているほどですから。今は、佐藤駿選手の後ろ姿を見て一生懸命練習に励んでいます。こうして次々と若手が育っているのは、やはり連綿とバトンがつながっているからだと思っています。

## 3.「仙台方式」確立への道

### ①記憶に残るイベントに

パレード開催時の体制をどうするか、に関連した話になりますが、宮城県と一緒に河北新報社さんをお願いして実現できた最大のイベントは、東北楽天ゴールデンイーグルスの優勝パレードですが、一方、仙台市が中心となって手作りに実施できたのが荒川選手と羽生選手のパレードでした。

運営に当たって一番印象に残っているのは「ゴミを出さないパレード」を実現できたという点です。楽天も羽生さんも、「おめでとう」ではなく、「ありがとう」が飛び交っていました。これは羽生選手本人から出てきた強い「思い」です。「こんなにたくさんの人がパレードのために努力してくれている、また集まってくれることに感謝

します。ありがとうございます」と本人が言いました。皆さんにお礼を言いたいわけですね。おめでとうじゃない、応援してくれたその気持ちに「ありがとう」の気持ちで応えたいと。

ファンのかたがた、沿道に並んだ市民は「おめでとう」だけど、本人は「ありがとう」と応えるというわけです。「ありがとう」が飛び交う。誰も書かなかつたし、多くのかたがたは知らないことではありますが、そういう要素もあって成功裏に終えることができました。

## ②最後まで安全に、美しく

2013年11月24日開催した楽天イーグルスの優勝パレードの人出が21万4千人といわれていますが、ゴミが出なかったことに対して知事と市長が本当に驚いていました。パレードが終わっての帰り、河北新報社の前から村井知事と奥山市長とバスに乗った時に、市長から「ところで、ゴミはどうなるの」と聞かれました。係長に電話で確認したら「回収用のゴミ袋をいっぱい用意しましたが、全然ゴミがありません」との返事。それを伝えると皆さんとても感心していました。

あの時のゴミのないパレードが誇るべきパレードになったと思うのは、その後ニューヨーク・ヤンキースのあの紙吹雪が舞い散るパレードの画像を観るにつけ、これどうやってゴミ処理するんだろうと考えさせられました。仙台はそれとは真逆に全くゴミのないパレードを実現させていたわけです。今では、ゴミを出さない「エコパレード」がスタンダードになっています。

「紙吹雪をやろう」という話をしたこともありましたが。事務局としては事故が起きたら大変なことになると分かっていたので説明し、最終的には紙吹雪をやめました。それで旗とかの応援に切り替え、あとは「自主的にゴミも持ち帰りましょう」と呼びかけました。あれがクリーンできれいなパレード、のちに、いわゆる「仙台方式」といわれる「エコパレード」の始まりです。だか

らパレード全体を観ても、写真に撮ってもとにかくきれいです。

仙台のパレードのマナーの良さと優秀さ、行き交う「ありがとう」という言葉に象徴される、自分たちのわが街のヒーローを仲間とし称え感謝する。まさにわが街の誇り「シビックプライド」です。

それに事故・怪我人も出ませんでした。あれだけの人出があったにもかかわらず、何にもありませんでした。ファンの皆さんは高揚したでしょうが、きちんと節度を守って応援してくれていたのが伝わりました。

## ③時宜を得た目利き

今後のパレードについては、今回のミラノ・コルティナオリンピックの佐藤駿選手とか、惜しくも第4位だった千葉百音選手も、将来的にはパレードの可能性は十分あると思います。メダルを取ったらパレードはやった方がいいと思います。要はその時の担当者(スポーツ振興課の係長・課長とか)が、どう判断するかです。また、「やる」と判断して上申するかです。企業の社長さんも首長も、上の人は絶対に「誰が判断したの」と聞きます。やはり担当する職員としたら迷い、考えると思います。もし私のところに相談に来たら「やるべき」と答えると思います。間違っても私のほうから「やれ」とは言えません。やっぱり役所の職員がどのぐらいの熱量で「やろう」と、そう考えるかにかかっています。いつも可能性はあります。

## ④プライドと迷いの狭間で

あまり話したことはないのですが、ジレンマでパレードできなかった案件もあります。2016年のリオデジャネイロオリンピック、女子ダブルスバドミントンで史上初の金メダリストになったバドミントンの高松ペア、高橋礼華選手と松友美佐紀選手です。彼女たちが仙台にいた時は寮に入っており、学校と寮を行き来して練習に

励んでいました。テレビのインタビューで「私、仙台のことは全然わかりません」と答えているのを見て、そうか一番町とか街の中を歩いたこともなかったのだらうと思いました。高橋さんは中高で6年間、松友さんは高校で3年間仙台にいましたが、学校と寮の往復だけで一生懸命練習に励んでいたわけです。それで金メダルを取ることができたのは称賛すべきことですが、仙台にいたことがあるというだけで、本当にパレードしていいのだろうかと思いました。同じリオ・オリンピックでは仙台市生まれで「愛ちゃん」の愛称で親しまれている卓球の福原愛さんが銅メダルでした。この時、藤本章副市長から「金メダル取った高松ペアの2人がいて、銅メダルの愛ちゃんもいる。どうしたらいいと思う」と電話をもらいました。私は3人一緒にパレードの車に乗せては絶対駄目だと判断しました。愛ちゃんのプライドを傷つけないし、愛ちゃんに乗るわけがないでしょうと言いました。それでパレードは行わないことにして、2016年10月5日にバドミントン女子ダブルスで金メダルを獲得した高橋礼華選手と松友美佐紀選手に当時の奥山市長が市役所の前で「賛辞の楯」を贈呈しました。また10月18日には卓球女子団体で銅メダルを獲得した福原愛選手に市長が「賛辞の楯」を贈ったのです。それぞれそのワンシーンだけ作ることができました。

そういう点で、このパレードの開催発案の際には見えないルールがあった気がします。やはりこの街への貢献度とか、いかにこの街のために頑張ってくれたのか、街を愛する気持ちがあるか、その人のパレードを行うことによって、市民の皆さんが喜びを共有し、「この街が好きだ」と共感してつながれる「シビックプライド」がなければならないということです。

今の話に出てきた人たちは、皆さん仙台にいた人です。荒川さんもそうだし、羽生さんは小さい時から仙台市民で、東日本大震災の時も市内で被災しています。楽天はチームとして入ってき

てもらい、ベガルタ仙台も当然そうです。福原愛ちゃんも金メダルを取っていれば当然やったでしょう。やはり地元、地域との絆のある人、生粋の仙台人とか、そういう環境で育った人だと市民も街も盛り上がります。元々スポーツの効果とはそういうものです。スポーツの力がもたらす市民の感情があるからこそ、パレードが盛り上がるのであって、この街だからできたものです。

最初に荒川さんのパレードをやりましようと言った時、当時の局長、上司も同僚も含めて賛同してくれて、時間がかからずトントン拍子で決裁いただけました。私が梅原克彦市長に説明に行った際、「本当にやれるの」みたいな聞き方をされました。日にちも決めて伝えたら「なぜこの日、それも月曜日なのか」と言われました。3月26日の計画でした。過去の気象データも調べて、晴天の確率の高い特異日がこの日で月曜日でした。「なぜ月曜日でそれもお昼にやるのか」と、次々と質問攻めでした。この日は月曜日ですが、調べたところ過去何十年間雪が降ったことがありません。お昼の時間帯ですが子どもたちは春休みで学校は休み、沿道のオフィスの人たちもお昼の時間帯だから絶対に観られる、人が集まりやすいのでこの日、お昼にします、と説得して実現したのです。

#### 4.人脈づくり

##### ①根気強く足を運ぶ

今年の宮城県サッカー協会の新年会に日本サッカー協会の宮本恒靖専務理事が初めて来てくれました。私は日本サッカー協会には何回も行っていて、サッカーの国際大会を誘致してくるわけです。「ぜひ仙台で開催してください」「仙台でU-18やるのでお願いします」というように、何度も足を運んでいると、それに動かされるんですね。

バドミントン協会、ソフトボール協会、バレー、バスケットボールも同様。何度も顔を合わせ、仙台市の協会と県協会にもお話をしながらご

挨拶して、仙台でこういうふうにやりたいんです。ぜひ世界大会を、仙台開催でよろしく願います。そうして人脈を作ってきたということです。

## ②初めてのトライがノウハウになる

2004年のライブドアか楽天かという時、藤井市長はあまり野球に詳しくなくて、佐々木謙副市長が対応していました。両方の挨拶を平等に受け入れていましたし、仙台市側としてはどちらに来てほしいとか公表していません。おそらく本当のところは日本プロ野球機構の関係者しか分らないと思います。全て副市長が対応し、プロ野球機構の各チーム代表が来庁し、代表の皆さんに副市長がプレゼンテーションしました。さすが副市長で、これまた素晴らしいプレゼン内容でした。

今、仙台市には市民球場がありますがその当時はなくて、やはり宮城県の今の球場がどうなるかと。それに県は直しますよという約束をしながら誘致に動いていたと思います。何もないとこに半年で5階建てのビルを造ったわけですからこれもすごいです。もともと仙台駅東口一帯の道路整備計画はありましたが、あんなに盛り上がるとは思っていませんでした。楽天球団が来て仙台市の中心部はもちろん、街全体が変わりましたね。特に東口は活性化されました。

## ③ウイン・ウインのネーミングライツ

野球はそういう面では強いコンテンツですが、野球場の隣の陸上競技場のネーミングライツも実施しました。かつての宮城県陸上競技場の指定管理者は宮城県スポーツ協会でした。最初の指定管理者選定の際は仙台市スポーツ振興事業団が負けまして4年後に指定管理者になることを目標に研究、提案をして指定管理者の権利を獲得しました。

もう一つ。当時の仙台市には400メートルの公認トラックも、陸上競技場自体がありません。

昔は泉にありましたが私が壊してサッカー場とテニスコートにしてしまいました。これはごめんなさいですね。

もう県にしか残っていないので、仙台市としては、指定管理者としてネーミングライツを取って管理するというのが目標でした。仙台市財政局でネーミングライツを募集し弘進ゴムさんが獲得しました。弘進ゴムさんは広告効果があると思っていただいています。まさに指定管理者、ネーミングライツという手法はよかったと、大正解だと思います。

## ④頑張っている競技の支援

あまりメジャーな競技ではありませんが、ソフトボール協会のサポートも印象的でした。東京に行くたびに日本ソフトボール協会に行きました。「仙台市での大会開催はどうですか」「競技大会はどうですか」と、オリンピックの前は必ず行っていました。ソフトボールの大会に、何千人、何万人とお客様が来るという現象が起こり、マイナースポーツの競技団体にも日の目を見る機会が作れたと思っています。仙台市内では朝起き野球とソフトボールが地域で盛んに行われています。国体の種目でもソフトボールがあります。宮城県は結構強くて、うちのチームには陸上自衛隊在籍のピッチャーがいるとか、そういう話をたくさん聞くわけです。私は30数年もスポーツ振興関連の部署にいたこともありますが…。

思った以上に競技の参加人口が多く健闘しているスポーツに対して、仙台市でも支援していかなければ、と思うわけです。何々の大会を誘致してほしいとか、うちの町でやってほしいとか、東日本大震災で駄目になったけれど、復旧できたら大会を開催したい、という、県の協会も市の協会も、皆応援してくれました。メジャーではないかもしれませんが本当に、すごく熱心でした。

そのきっかけになった一つが2001年に県内で開催された第56回国民体育大会、いわゆる

宮城国体でした。この宮城国体は仙台市では開催できなくて、当時の矢本町（現東松島市）に球場があり、少年男女の会場。成年男女は女川町でした。

## ⑤ 広報の重要性

2001年の国体のときには、PRのためいろいろテレビにも出ましたが、やはり「いつ・どこで・どんな」競技が行われるのか分かるようにチラシを作り、駅の案内所と三越の前で配布したのが良かったようです。次の年の開催地である高知県国体実行委員会の皆さんが視察に来て、チラシとか藤崎前から応援FAXを送ったりするイベントの仕掛けを見て感心していました。せっかく県下で開催されている国体ですから、見に行ってもらうためには「いつ・どこで・どんな」競技があるのか、その情報を網羅したタブロイド版を制作して配布しました。

そして当時日本一と言われたのが運営ボランティアでした。国体イヤーの年間を通じて全国から1万5千人の運営ボランティアが参加してくれました。選手や関係者の皆さんを受け入れるため「民泊」を利用するようになったのもこの大会がきっかけで、後年の大会は同様の手法が導入されるようになりました。

## ⑥ メディアと得意な競技にアプローチ

スポーツ大会の誘致には、メディアとのコラボレーションも大事です。元々女子バレーボールのアジア選手権は仙台開催の誘致に行って、「負担金も払います」「予算化もしました」「仙台でやりましょう」と交渉した結果招致が決まりました。その年の6月に開催される予定でしたが、SARS（サーズ：重症急性呼吸器症候群）が流行してしまい、藤井市長に呼ばれ「仙台で開催して市民がSARS感染したらどうする、中止にしてください」と言われました。それで日本バレーボール協会に出向いて中止することになりました。

「WHOの報告にあるとおり感染者が増えてパンデミックになっては大変です。駄目です、仙台市では開催できません」ということです。WHOが収束宣言してから再度検討することにしました。その後、同じ年の12月ころにはSARSも沈静化し、翌年1月に開催できたのです。

地元によく知らせるためにはメディアとの付き合いも大事です。国体の告知では河北新報社さんと一緒になって考えて、「煙突」という記事体広告を制作してもらいました。普通の記事下広告ではなく、社会面の隣に煙突のように縦長の広告スペースを組んで、上から下までスッと読めるわけです。こういうことが地元の新聞社と付き合いしているとできるわけです。

私は元々そういうのが強い人間ではないけれど、テレビ局も含めて地元のメディアとつながりやアイデアを出し合わないとはうまく進みません。腰を低くして「申し訳ありません」とお願いすることもたくさんあります。

私は、多くの皆さんに広く知らせるには、テレビやSNSだけではなく、新聞でお知らせすることも非常に大事だと思っています。

次項では、まとめとして、これからスポーツ関連事業に関わる人たちに伝えたいこと、これまでの経験から感じていることを幾つかお話ししたいと思います。

## 5. 継承

### ① メディアとの付き合い方

そのコツは「偏らないこと」です。要は選ばないこと。知ったかぶりせずに分からないことは「分からない」と、素直に「すみません教えてください」とか、「可能ならここを取材してください」と、素直にお願いする。それができる付き合いをすることです。

楽天の例です。楽天優勝パレードを計画した時のことです。パレードの中継や取材について、テレビ局や新聞社の皆さんが賛同してくれるか分からないけれど、地元メディア各社に集まって

いただいて、県庁の会議室で「よろしくお願ひします」と言っテ頭を下げた結果、あんなにうまく放送されて、新聞にも掲載されたわけです。素直にいろいろなことを隠さず正直にお願ひすることです。

メディアと素直に付き合えたことで成功したのが、羽生選手の2回目のパレードでした。事前に確認したところ、パレード当日は各社がヘリコプターを飛ばす計画でしたが、調整し1機だけ飛ばして空撮のカメラ映像を共同編集して放送することにしました。局同士も1機のヘリコプター映像を共有してコスト削減が図れることから、民放とNHKも一緒に羽生さんのパレードの配信映像を放送することができました。仙台市がメディアセンターの運営を行い、メディアとの付き合い方、情報の流し方、全てを公平に行ったことが成功につながりました。

公平にやりすぎて某局から嘸みつかれたこともありました。「フィギュアはわが社が強いのになぜ、全て横並びなんだ」とガンガン言われました。クレームを言われても、どこか一つのメディアに傾いたら絶対駄目です。フラットなお付き合いを貫くことで他のメディアとの良い空気を作れたと思っています。

とは言え、最後には少し配慮して、その局には特別に3分間だけインタビューの時間をあげるから、あっちの隅で羽生さんの画を撮っていいよ、とフォローしました。大喧嘩した後でもその場で納めるといふ大人の配慮です。

それに対して、他のメディアの人たちが目くじら立てるようなこともありません。次は自分もと思っテ胸にしまっテくれているようです。今ではNHKも含めて各社、素直に受けとめてもらっテいると思ひます。

## ②SNSの対応

「SNSの怖さ」ということに関してですが、羽生さんのパレード開催の時に、「金メダリストをトラックに乗せてパレードするなんて」とSNSで

批判され、炎上したことがありました。でもそれはちゃんとしたパレード用のトラックでしたが、トラックの上に乗せてパレードする間違った話が、一時的にすごく広まっテしまい、これはネガティブなニュースになりかねないなと判断して、火消しをしました。パレード専用のトラックであることを説明するプレスリリースを後から再度流したりしました。

今後パレードを開催する後輩たちにとっては、SNSへの配慮が必要になってくることを、肝に銘じておいてほしいと思っテいます。以前はメディア対策が主で良かったのですが、これからはSNS対応になりますから。

あの時のパレード用のトラックですが、和歌山県の方にあつた当時日本に1台しかない車両で、結果的にパレードに最も適した車両でした。二番丁通の真ん中を進むパレード車両を沿道のどの方向からも観ることできる構造でしたから。

SNSでいろいろと言われはしましたけれど、あんな良いものは他にありませんでした。現物をみんなで見たら、見た人たちは異口同音に「おお、すごいね」っテ話してました。SNSでいろいろと言っテくる人がいても、あまりいちいち答えていくのも良し悪しで、逆に行き詰っテ、大変なことになってしまいがちですから、ある程度は線引きして、前を向いて関係の皆さんと協力していくという姿勢が必要です。

いやだと思ひ始めたら、誰もこんなことやりたくない、と思っテかも知れません。ですから、やる気や気持ちを大切にしながら、「どこまでやるか」という判断力も必要だといえます。人それぞれの価値観の問題だと思ひます。荒川さんも、楽天も、羽生さんも、その人の功績や価値を見た時に、喜びを分かち合えるパレードなどの祝勝イベントをやるべきだと感じる人が出てくれば、今後も何回かパレード開催のチャンスはあると思ひます。

### ③仙台とフィギュアスケート

二番丁通の反対側にパレードが終わった夜中に行ってみました。周辺を歩き回って、羽生選手がここに来たんだと思うと胸が熱くなりましたね。あのパレードはすごいことだったと実感しました。本当にケガ人も出なくて良かったなと。仙台市民が大人しいという失礼かもしれませんが、今は本当に市民の皆さんが、自分事として協力的だったのだと感謝するばかりです。これこそ「シビックプライド」と言えます。

仙台はフィギュアのメダリストを輩出していますが、決してフィギュアスケートをする環境が整った街ではありません。本来であれば恵まれた環境があってトップアスリートが生まれるわけですが、唯一、「フィギュア発祥の地」というぐらいしか、仙台には拠り所がありません。当時たまたまいい指導者がいて荒川さんが育ち、そこからスタートしています。

かつて、仙台市にはオレンジワン泉と勝山スケティングクラブの通年型リンクがあって、より良い練習環境を求めて多くの選手が集まっていました。そのオレンジワンのコーチとして長久保裕<sup>※2</sup>さんという指導者がいました。長久保さんが指導する中、荒川さんをはじめ皆あそこがベースでした。今は経営者が変わり、長久保さんは名古屋に移っていますが、本郷理華さんも教え子です。荒川さんとの年齢差はずいぶんありますけれど、荒川さんは「アイスリンク泉」で長久保さんという優れた指導者に教えてもらっていました。いい指導者がいたからこそ、そこからオリンピックが育ったわけです。

羽生選手も2011年3月11日、あそこで練習していました。震災の地震でリンクと冷凍機械が被害を受けて全部駄目になった時、今の運営会社の加藤商会の社長さんが仙台に来られて善後策を検討しました。ここを拠点に羽生選手を筆頭に育てている人が大勢いるわけですから、ここは何とか復活させなければという思いでした。その結果少し時間がかかりましたが、

宮城県5千万円、仙台市5千万円、加藤商会も5千万円拠出することになり、1億5千万円でアイスリンク泉を修復しました。その間、羽生選手は練習場所を求めて八戸に行っていましたが、仙台市内で練習できる環境になったので戻ってきました。その後の結果はご存じのとおり金メダル2大会連覇の偉業を成し遂げました。

仙台市はパレードだけではなく、その火を消さないために、日本のフィギュアスケート発祥の地と言われる五色沼の近くの国際センター駅前に、羽生結弦・荒川静香両選手のモニュメントとパネルを設置しました。

いろいろな見せ方があると思いますが、他の都市ではできない唯一無二の成果で、これは仙台市の姿勢としてとてもいい考え方だといえます。羽生選手は結果として二つになりましたが二つできたというのがとてもよかったです。市民や観光客が気軽に行き写真も撮れるので、非常に良いコンテンツになっています。

あのときも民間から協賛金を受け取っていますが、街中にモニュメントを作る際に民間の協賛金を集めたというのは珍しい例です。それは花壇自動車学校さんや東洋ワークさんなどに意図的に仲間に加わってもらおうという手法でした。「わが街のヒーローを自分事にしてもらおう」という狙いです。どこでもそうですが、市だけでモニュメントやパネルを設置するとなると、「一個人を称えるために税金を使うのか」とか「そういう予算の使い方は反対だ」とかいう話が必ず出てきますから。そういう方法を議会も含めて皆さんに説明し、納得いただいて実現しました。

国際センター設置の当日はお披露目を兼ねて羽生さんと荒川さんのトークショーが開催されました。仙台のファンだけではなく県外からも千人を超える人たちが来場しました。

(脚注)

※2 長久保裕(ながくぼ ひろし):日本の元フィギュアスケート選手、フィギュアスケートコーチ。1972年札幌オリンピック代表。1972年札幌オリンピックでペア16位に入った。競技引退後は千葉・新松戸

で指導者となる。1988年から仙台市の「泉DLLアカデミー」のコーチとなる。その後、長久保氏に師事すべく各地から有望選手が集まり、1998年長野オリンピックには本田武史、田村岳斗、荒川静香、荒井万里絵と4人の教え子が出場した。

#### ④課題は、国際大会開催可能な施設

スケートリンクの問題もありました。

今回のスケートリンク再開には、東京に本社を置く株式会社加藤商会および株式会社パーティネレジャーとも連携していました。国際大会などでは氷の厚さや質などに細かな規定があります。例えばNHK杯国際フィギュアスケート競技大会を呼ぶときの氷の厚さは普段とは違うとか、彼らはすごく細かい技術のノウハウを持っています。2007年に、市の上層部から仙台市体育館でNHK杯国際フィギュアスケート競技大会を誘致できないかと打診がありました。そのころ、日本スケート連盟は不正経理事件で、とても微妙な状態でしたが、日本オリンピック委員会(JOC)に行きました。実は以前、国際フィギュアスケート競技大会は5年後に仙台でやると決めてもらっていましたが、新体制になっており、当時の方たちはいなくていたわけです。あの時の話は流れてしまって、もうできないかもしれないと覚悟を決めて交渉に臨みました。「これまで一生懸命交渉して準備してきたのに白紙はないですよ？開催の順番も数年先まで決まっていますよね？」と根気強く交渉し、「大丈夫です。仙台でやります」と回答をいただき、仙台市体育館を会場に開催する確約が取れてほっと胸をなでおろしました。

しかし今度はリンクの規定という問題がありました。氷の厚さやリンクから審判席との距離の規定、オーロラビジョンの設置と、それに係わる会場の四つ角に当たる観客席の販売不可の数といった、細かな調整が大変でした。普通なら5千席販売できるのにこうした縛りがあって3,300席くらいしか販売できませんでした。それから規定ではフィギュアスケート、アイスショーも観客は絶対立って応援しないことになってい

ます。バックヤードやメディア対応のスペースの確保など細々したことが決まっています。事前の約束があったので、この時は開催できましたが、仙台市では次の開催はできないことを突き付けられた形になった大会でした。しかしながら、大きなフィギュア競技大会を誘致する場合のノウハウはしっかりと残ったのです。

誘致しようと思っても、新しいスケート場作りが現実には難しいですね。利府町のグランディ21なら可能ですが、仙台市にはないわけですから。

#### ⑤スポーツコミッションせんだい

ここでスポーツコミッションせんだいを設立する前の話を一つ。

私が仙台市を退職する時、当時の奥山市長から「武田さんはこのあと何をやるの？」と聞かれました。結果的に公益財団法人仙台市スポーツ振興事業団にお世話になるのですが、すると仙台市だけで完結できないことがどんどんできてきてしまい、奥山市長からも次なる打ち手を求められ、「この問題を解決するにはスポーツコミッションが必要です」回答したことがスポーツコミッションせんだいの設立につながりました。

スポーツコミッションとは、スポーツや関連イベントの振興や支援を、広域的に都市連携で行う業務のことです。2026年のミラノ・コルティナオリンピックもこのスタイルですね。

このスポーツコミッションせんだい設立の時定めたのが「する、みる、ささえる。」というコンセプトです。そして私はこれに「ひろがる。」を加えました。この「広がる」は企業のことを指しています。

#### ⑥組織づくり、そして協働と役割分担

現在のイベントの実行組織づくりという点では、最初の荒川静香さんのパレードのようなイベントでしたら、市庁舎内部の職員で運営できると思います。宮城県警に相談し、民間企業の

支援もいただきましたが、宮城県職員の参加はなかったのが、本当に市役所内の実行組織で完結できたパレードだといえます。例えば、卵の黄身のまわりに白身があるような感じで、中心には仙台市役所があるかもしれませんが、その周りにメディアや企業がいい距離感で一緒に立ってくれている、そんなイメージです。

東日本大震災の後に始まった「東北六魂祭」は仙台商工会議所との連携で、当時の間庭洋専務理事のお骨折りがあって実現しました。その後は東北6県持ち回りで開催され、やがて毎年の継承イベントに代わり、2025年の大阪万博では東北6県の祭り「東北絆まつり」が東北の復興を世界に知らせましたね。当時、奥山恵美子市長と間庭専務理事とのつながりや、代理店や河北新報社のサポートもあり、スムーズな運営ができました。

イベントの開催に際し、民間や市民から集まったお金や開催後残ったお金を活用することを考えると、仙台市や宮城県などの役所がトップに立つわけにはいきません。

楽天の優勝パレードにしても、予算がどれくらい必要なのか想像もつきませんでした。チーム全員がパレードに参加するにはバスが5台必要だと分かっても、それで幾らかかるのか分からないわけです。そして、6千万円かかるといわれても、今度は「どうやって資金を集めるか」という問題に直面します。単価3千円のバッチを売ることで可能なのだろうか…と。

河北新報の児玉聡さんが、日本ハムファイターズの祝勝パレードの情報を集めてくれ、優勝カウントダウン時点から新聞紙上で盛り上げてもらい、協賛金集めも河北新報社さんに番頭役をやってもらうことになり、協賛金の窓口には、一緒に事務局運営にあたってくれる仙台商工会議所さんをお願いしました。そうして、結果として、周りの企業や団体、市民からの協賛金などで助けていただきました。このように、「協働」と「役割分担」を明確にすることによって、より大

きな相乗効果が生まれることを体験することができたと考えています。

武田 均(たけだ ひとし)

[プロフィール]

1953年宮城県仙台市生まれ。東北学院大学法学部卒業後、1976年に旧宮城町役場に入庁。仙台市と宮城町の合併に伴い、1987年仙台市職員に。教育局スポーツ課長、仙台市東京事務所長、市民局次長兼文化スポーツ部長を経て、2014年公益財団法人仙台市スポーツ振興事業団の常務理事へ。その後同事業団の相談役を経てスポーツコミッションせんだい副会長に就任。藤井黎、梅原克彦、奥山恵美子、そして現職の郡和子市長と4代の市長に仕える。

令和7年度 スポーツ庁国庫補助事業

スポーツマネジメント人材育成事業 教本  
「仙台スポーツクロニクル」

# THE CHRONICLE OF SENDAI SPORTS

2026年3月31日 第1刷発行

監修 児玉 聡  
著者 児玉 聡  
清水 義明  
泉田 和雄

協力 河北新報社  
発行所 ブレイン・ワークス株式会社

<https://bw-inc.co.jp/>

〒980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町2丁目6-16 シントウビル8F

電話 022-262-6196